

第 19 回KOSMOSフォーラム 21 世紀の新しい環境観

「大地と人」～地球生命を支える場～

日時 2009 年 9 月 26 日（土）14:00～16:30

場所 ベルサール飯田橋

パネリスト

内山 節 氏（哲学者）

小清水 漸 氏（彫刻家、京都市立芸術大学 教授）

佐藤洋一郎 氏（総合地球環境学研究所 副所長・教授）

武内 和彦 氏（国際連合大学 副学長、東京大学大学院 教授）

コーディネーター

原田 憲一 氏（京都造形芸術大学 教授）

（司会） 本日は、第 19 回KOSMOSフォーラムにお越しいただき、誠にありがとうございます。私は本日の司会進行を務めさせていただきます北川と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、大変長らくお待たせいたしました。ただ今より、「第 19 回KOSMOSフォーラム「大地と人」～地球生命を支える場～」を始めさせていただきます。このKOSMOSフォーラムは、これまでの分析的、還元的な科学ではなく、統合的・包括的視点でさまざまな問題にアプローチすることを目的に、毎年テーマを定めて議論を積み重ね、今年で7カ年目となります。今年度のテーマは、昨年度に引き続き、「21 世紀の新しい環境観」です。今回は「大地と人」と題し、地球生命を支える場について幅広い議論をいただきます。

それでは、KOSMOSフォーラムを開始してまいりましょう。

では、パネリストの方々にご登壇いただきます。まずは哲学者の内山節先生です。京都市立芸術大学教授、小清水漸先生です。総合地球環境学研究所副所長・教授、佐藤洋一郎先生です。国連大学副学長、東京大学大学院教授、武内和彦先生です。そして、本日のコーディネーターを務めていただきますのは、京都造形芸術大学教授、原田健一先生です。

それでは原田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

(原田) 皆さんこんにちは。これから2時間半、「大地と人」というテーマで議論していきます。

いま「21世紀の新しい環境観」が求められています。つまり、人口が激増して社会が危機を迎えている時に、従来の個別的な学問分野にのっとった環境観では駄目だということです。しかし、それをどういう方向で考えればいいのか。それもまだ手探り状態である、というのが正直なところです。

今日は生物学分野から武内さんと佐藤さん、哲学分野から内山さん、そして芸術の立場から小清水さんにご参加いただきました。皆さんノーネクタイですので、お互いにさん付けでいくことになっています。

今まで「大地と人」と言うと、もっぱら人間の側から見て、足元にある土台だと捉えていました。しかし、私が専門とする地球科学から考えると、大地に視点を移さないと、地上の生き物を育むモノ（場と機能）である、という発想は出てこないと思います。また、大地には46億年という長い歴史があります。地球そのものは今後何億年も存続しますが、現在までの歴史の中では人間が一番新しい生き物である、という歴史的視点を持たないと現状を批判的に見ることはできません。

これから議論を始める前に、なぜ上記二つの視点が必要か、を説明したいと思います。

(以下スライド併用)

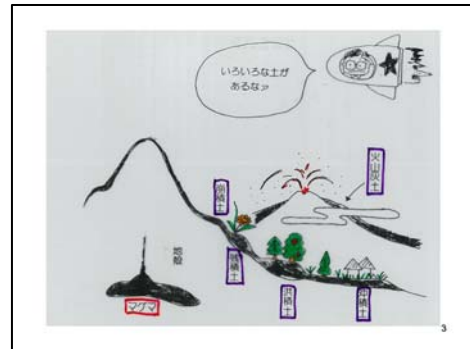
○「環境の土台としての大地」という題でお話します。どうして大地つまり地球が生命と結びつくのか。皆さまには分かりづらいと思いますので、地球科学の観点から、両者の結びつきを手身近に説明します。



○高校の教科書に出てくる岩石の種類は、火山岩では安山岩や玄武岩、堆積岩では石灰岩や頁岩と言われるような岩石ですが、こうした岩石が生き物を養っているとは皆さまには想像もつかないでしょう。しかし、岩石が風化して生じる「土」に視点を移してみると、地球と生命との関係はぐっと見やすくなるのです。(スライド2)

○私たちは、地球にだけ生き物が存在する理由を、以下のように理解しています。つまり、

植物が太陽光を受けて、水と二酸化炭素で光合成してでんぷんを作る。それが植物内部で油脂やタンパクなどに変わり、それを食べる草食動物の肉を肉食動物が食べることによって生態系が維持されている。だから、太陽と水と二酸化炭素さえあれば植物は育つということで、野菜工場という発想が出てくるわけです。



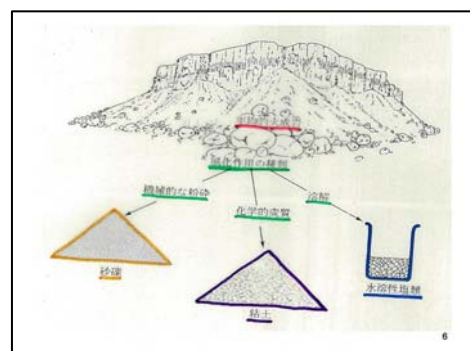
しかし、ご存知のように、窒素・リン・カリウムは植物の三大栄養素と言われ、全部がそろってタバコの葉っぱは青々と育ちます。しかし、カリウムが欠けると、葉っぱは黄色くなります。リンを欠くと全体が黒ずんでしまい、窒素を欠くと成長不良になります。

(スライド4)

○そのほかにも、木の葉を支える枝にはカルシウムが必要ですし、葉緑素にはマグネシウムが必要です。全部で16種類の生命元素がないと、植物は生育できません。しかし、水と二酸化炭素には、酸素と水素と炭素、たった3種類の生命元素しか入っていません。窒素は空気中にありますが、残りの12種類の生命元素は、すべて土からしか供給されません。



○土の主成分の一つは砂利です。砂利によって土が硬くなり、そこに根っこが根をはって木を支えるわけです。しかし砂利だけだと、いくら雨が降っても水は地下に浸透してしまって、少し日照りが続くと水不足になる。だが幸いなことに、もう一つの成分である泥（粘土）が表面に水分を吸着します。だから、砂利と泥が適当に混ざることによって、土は適度な硬さになって水分を保持します。そして、岩石から溶け出した水溶性の無機養分つまり生命元素が、水と一緒に根っこから取り込まれて、植物の成長を助けるわけです。



○山の岩石が風化すると、砂利と泥（土砂）が生じます。土砂が山から平野に流され、最

最終的には海に入ります。生命元素は海の生き物にも必要です。海水には 92 種類の天然の元素が溶け込んでいますが、多くは濃度がとても薄くて、生命元素も多くが欠乏しています。したがって、海の動物も植物も、海水だけでは生きていけません。陸上から無機養分に富んだ土砂が運び込まれるから、必要な生命元素が摂取できるのです。これは海をテーマにした前回の KOSMOS フォーラムに登壇した畠山重篤さんの本です。



○土砂が山から海へと一方的に運ばれるだけだと、陸地は一方的に削り取られます。一番上の写真はヒマラヤの山脈の一部です。9000m 近い高まりですが、5000 万年間あるいは 1 億年間も浸食されると、真ん中の写真にあるスコットランドの山岳地帯のように、起伏が 1000m 以下のなだらかな山の連なりになります。1 億年以上たつと、地面はまっ平らになります。一番下の写真はアメリカ中西部の大平原です。こうなると、いくら雨が降っても風が吹いても土はほとんど動かないので、生命元素の供給が途絶えて、生き物は発展できなくなるはずですが、ところが陸上に生き物が現れてから 4 億年もたっています。この事実は、過去 4 億年間、土を生み出す山が一回も消えたことがなかったことを意味しています。なぜかと言えば、地球自体が自ら山を作り出す力を持っているからです。



○一つは火山です。米国の西海岸にあるセントヘレンズ火山が 1980 年 5 月に大噴火した時、私は風下の内陸部にあるワシントン州立大学にいたので、火山灰まみれになりました。今思うと、貴重な体験でした。一般に、富士山のような大きな成層火山は、およそ 100 万年間、断続的に噴火を繰り返して成長します。そして、噴火が終焉すると、山体から土砂が削り取られて、1000 万年ほどで消えていきます。



○もう一つは、大陸の衝突がつくる巨大な山脈です。ヒマラヤ山脈は、インド大陸がプレ

ートに乗って北上し、およそ 4000 万年前にアジア大陸と衝突したために、両大陸の間の海に溜まった堆積岩が両側から押されて盛り上がった高まりです。あと 1 億年以上は山脈として存続するでしょう。

陸地は常に削られています、一方で火山が噴火したり大陸が衝突したりして、新たな山が作られているので、地表がまっ平らになることは無いのです。 (スライド 10)

○地球内部はまだ熱くて、中心部にある高温の核が外側のマントルを温めるので、軽くなった岩石がマントルの底から地表付近に上昇してきます。そして、地表付近で冷やされると重くなって、再び地球内部に沈み込みます。このように、マントルは 1 億年単位で対流しています。

マントル対流の上面、つまり地表付近は、厚さ 100 キロ、幅と長さが数千キロというプレート、つまり岩板が覆っています。もし地球の半径を 130cm にすると、プレートは表面の 1 センチになります。 (スライド 11)

○地表を覆う十数枚のプレートが、マントル対流に乗って水平に動くことで、地震や火山活動が起こります。プレートに乗った大陸が移動して他の大陸と衝突すると、大山脈ができます。地球内部に残っている熱が地表に大きな起伏を作っているのです。一方、火星と月はもう内部が冷え固まっているので、大地は動きません。つまり「死んだ星」です。もしも火星と月に水と空気があったとしたら、遅くとも 1 億年以内に、地表はまっ平らになってしまうでしょう。すると生き物は、死滅することはありません、進化・発展はできません。ところが、地球のように内部熱によって自ら動いている星、すなわち「生きている星」では、常に山で生み出される土砂が生き物を養っているわけです。 (スライド 12)

○私たちは大地の上で生きていると思っていますが、実際はいろいろな天変地異によって生かされているのです。これは三宅島の火山噴火に伴った地震で生じた崖崩れです。この崩れ落ちた土砂が田んぼを肥やし、最終的には海に流れ込んで、海藻や魚貝を養うのです。災害は地球が生きている証であり、地表の生き物にとって大きな恵みでもあるのです。



○地球環境と聞くと、多くの人は、森林や大草原、サンゴ礁などを思い浮かべます。しかし、地球は単なる生き物の土台ではありません。実際は、地球自体の動きが、あらゆる生き物を養っているのです。大地を見る視点を人間から地球に移さない限り、人間は何でもできるという、20世紀までの驕り高ぶった発想から抜け出すことはできないでしょう。

(スライド 14)

○地球は 46 億年の歴史を持っています。地球誕生を 1 月 1 日午前零時として、現在を 12 月 31 日の夜の 11 時 59 分 59.9 秒とすれば、生命が誕生したのはなんと 3 月 4 日、38 億年前です。酸素が出てきたのが 30 億年前の 5 月 6 日。そして陸上に生き物が出てきたのは 4 億年前、11 月 28 日です。人類の出現を 200 万年前とすれば、12 月 31 日の午後 8 時になりますが、私たちホモ・サピエンスの出現は 20 万年前なので、大晦日の夜 11 時 37 分です。それが、わずか 1 分前に農業を始め、30 秒前に文明を作りました。そして、2 秒前に産業革命を起こして、いま環境危機に直面している。明らかに最後の数秒間の変化が現在の危機をもたらしたのです。したがって、場当たりの対処法をあれこれと考えるのではなくて、人間とは何か、生命とは何かという根源的なところから考え直さないと、現状の危機を総合的・体系的にとらえることは難しい。私は、そういう大地観を持っています。

(スライド 15)

この「生きている大地」、「歴史を持つ大地」ということを頭の中に入れた上で、4 人のパネリストの話題提供をお聞きください。ご清聴ありがとうございました（拍手）。

（原田） では武内さんから、ランドスケープ（景観）の中での人間と自然のかかわりについて、お話しいただきます。

（武内） 皆さんこんにちは、武内です。私は今朝、サウジアラビアからずっと飛行機を乗り継いで戻ってまいりまして、やっとこの会に間に合ったわけなのですが、何のためにサウジアラビアに行ったかという、サウジアラビアにリヤドという町があります。紅海に面した町なのですが、そのすぐ近くに国王が、アブドラ国王という方なのですが、3 兆円くらいの基金を作って、国王の名前を冠した科学技術大学を作って、そこで世界の英知を集めて研究を始めようということで、その設立の式典と、それからその後のシンポジウ

ムに出てきたわけです。

この大学は何をするかというと、当然皆さん、産油国だから石油のことでも研究するのかなと思われると思うのですが、全く違って、いかに太陽光を中心とした自然エネルギーでサウジアラビアを変えていくことができるかというのを研究するのだと言っています。まさに大地の恵みである石油を捨てて、次の社会を考えようということですから、これは本当に文明の転換とでもいうような発想です。

それからもう一つ、大地と関係あるのですが、サウジアラビアで今使っている水というのは、ほとんど大地の中に埋もれている水なのです。これは取り尽すとなくなってしまいます。このままでは駄目だということが分かっているものですから、淡水化技術も含めて、どうやって水をサウジアラビアできちんと持続的に使っていくような仕組みができるのだろうか、これも非常に大きなテーマだということなのです。

まさに今、21世紀になって地球環境が非常に大きな問題になっていますけれど、そういう中で私たちが大きく発想を変えて、これからの社会作りをしていくということが重要なのだということ、私たちが、日本で考えるだけではなくて、世界でも考える、非常に重要テーマなのだなということを、これを聞いて、あらためて実感したわけです。

そんなことで、今日はサウジアラビアのことではないのですが、人と自然のかかわりについて、お話を簡単にさせていただきたいと思います。

(以下スライド併用)



○私の専門はランドスケープです。ランドスケープとは、風景というふうにとらえられる方も多いと思いますが、私は基本的に大地と人間が、いい関係を作ることでランドスケープが形成されるのだと考えています。その関係がおかしくなったときに、それが自然の破壊や、環境の破壊につながるのだらうということで、ランドスケープを通して、人間と自然のいい関係を考えていくことができるのではないかと考えているのです。

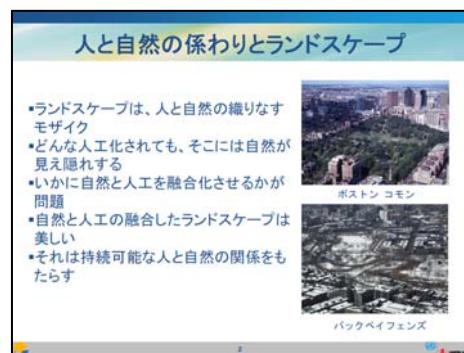
よく自然か人工かを言うわけですが、私は実は、地表にあるものは、本当の自然だけというものはもうほとんどないわけで、大体はより人工の色が強いか、あるいは、より自然の色が強いか、ということで、人と自然の織り成す、人工と自然のモザイクと捉えていい

のではないかと考えています。

実は私と全く同じことを考えている人がいます。
この方はアン・ウィストン・スパーンという、アメリカのマサチューセッツ工科大学（MIT）の教授で、彼女は花博記念協会のコスモス国際賞を受賞している方なのですが、都市を人工と考えるのは間違いだ

と、都市にもその基盤となる自然があると言っています。それは大地であると。大地の上に立っていなければ都市はできないわけです、当然。その上に、都市ですので人工化されていますが、やはり緑を通した自然がある。さらにその上空を眺めれば、雨が降ったり風が吹いたりする、これもやはり自然です。都市はそういうものだと考えて、そして見え隠れする自然を大事にしながら、どうやってうまく人工と調和させていくかということが大事なテーマなのではないかと、言っているのです。

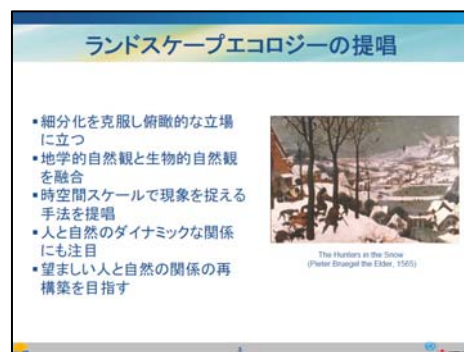
アメリカのMITはボストンという町にあります。もう一つ、大変有名な大学、ハーバード大学というのがあるのですが、この町は、自然をまさにうまく使いながら、ときには自然を改造しながら、うまく自然と付き合ってきたことで評価されています。松坂が所属しているボストン・レッドソックスのホーム球場がバックベイというところにありますが、このバックベイというのは蛇行した河川になっています。これはオルムステッドというランドスケープ・アーキテクトが、人工的に蛇行を作り、衛生環境を改善すると同時に、風景を都市の中に創造し、そして都市の価値を高めようとした、そういうデザインの結果なのです。ですから、これは自然か人工かと言ったら、その中間であるということになるわけです。



○そういうものをいろいろと調べていく研究分野というのがありまして、これを私たちはランドスケープ・エコロジーと呼んでいます。今の科学は、どんどんモノを細かく見て、ある専門分野で、私は地質をやるといともう、地質のことしか知らない。土壌をやると土壌しか知らない。植物をやると植物しか知らない。こういうふうになっています。私は昔、土壌学者と一緒にフィールドに行ったことがあるのですが、上に植えた植物については、ほとんど関心がなかったのです。そうではなくて、実はそれらがつながって自然を形成している。空間的にもさっきお話があったように、上流から下流までつながっている、こういうことを全体としてとらえようという分野なのです。そして同時に、地学的自然と

いうか、大地、地質とか、地形とか、それと生物的自然、その上に乗っている植物、動物。そういうものを融和して考えようということで、自然と人間のダイナミックな関係を総合的にとらえることを目指しているのです。

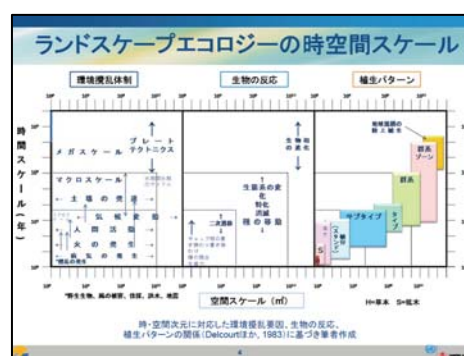
右に絵で示しているのは、ピーター・ブリューゲルという、大変有名な画家の作品なのですが、この人たちの作風のことを、ランドスケープ画というふうに総称します。これは伝統的な農村風景を表現したものが中心なのですが、ブリューゲルは季節、季節に、それぞれの人と自然の営みを、絵に表しているので、私たちは実は、ランドスケープ・エコロジーの本質がこういう絵の中に含まれていると、とらえているわけです。



ここで大事なことは、絵を見ていただくと、これは冬の景色なのですが、狩人が手前の方にいて、それから遠くに山があります。こういうふうにして空間のスケールが違う。ものすごく人に近いスケールから、岩山という遠いスケールまで、そういうものを一体として見るという考え方。それからもう一つは、時間というものを、人間・自然関係の中に織り込んでいく。これは冬の景色ですが、春の景色もあり、夏の景色もありということなのです。そういうことを表現しているものとして評価することができるということで、ランドスケープ・エコロジーの一つの具体的な例として、いつもお示ししているのです。

○それで、今、お話しした中で、時間と空間を一緒にする物差しを持っていると、いろいろなことが面白く分かるというか、理解できるということ、次に申し上げたいのです。

プレートテクトニクスというのは、先ほど説明がありました、非常に長い時間、それから面的にも地球全体を動かすような、大きなメカニズムです。実はそういう大きな大地の動きの結果として、いろいろな生物がいろいろなところに分布することになります。



それが陸続きの場合には共通性の高い生物群になりますし、離れた島のようなところでは、その地域の、固有の生物相ができるという形になっていくわけです。もっとずっと狭いスケールで見ると、時間スケールでいうと気候の変動だとか、空間スケールでい

うと人間が火を入れるとか、そういうスケールがどんどん狭まってくると、現象もそれにつれて、違うスケールでの生物現象が起こってくるのです。

○私が若いころに研究したオーストラリアというところは大変面白いところで、昔はゴンドワナ大陸にくっついていました。今でもその証拠が残っていて、オーストラリアの南の方にある植物と、それから南米の南にある植物と、それからアフリカの南にある植物が、実は同じ仲間だということがあるのです。それは昔、陸続きだったときの植物群が、隔離的に

今、分布するようになってきているからですが、基本的にはその大陸が分かれてから、オーストラリアは一人旅をしているのです。ずっと周りに大陸がない状態で移動しているので、オーストラリアというのは、大陸として捉えるよりも、海洋の真ん中にある島と捉えた方がいいと私は思っていて、そのようなことを論文に書いたことがあります。

そういう中で、とにかくオーストラリアは何が大きな特徴かという、ブナ科の植物、日本でいうと、ブナとか、シイノキやカシ、本当に森林の基本になるような、基本中の基本の植物相がないのです。ないものだから、別の植物が一生懸命、それを補ってその環境に適応することをやっているのです。その一つの例が、ユーカリという植物です。これが大分化して、一説には700種ぐらいあると言われていますが、そういうものが、異なる環境に適応するようになっているのです。

しかしこういう中で、人間がどう自然と付き合ってきたかということですが、かつてのオーストラリアの先住民の人たちは、うまく環境を使ってきたのに対して、ヨーロッパから入ってきた人は、あまり自然のことは考えずに、ヨーロッパの農業のようなことをやればいい、ということで農牧業を始めたら、ここに示しているように、砂漠化という現象が起こってしまったのです。ですからこういう問題を引き起こさないためには、やはりもっと前に、オーストラリアの大地の、自然の特徴を理解すべきではなかったのかと思います。そういう意味では私たちのランドスケープ・エコロジーの考え方は本来、そういうところに使うことができると考えられるわけです。

○その次に大地の変動とのかかわりで、大地と並んで大事なものは、気候です。気候変動が



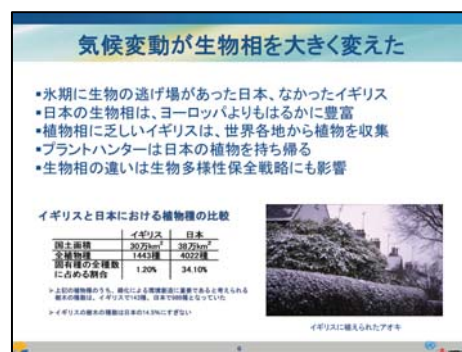
その地域の生物を大きく変えたという例として、ここでは日本とイギリスの比較をお話したいと思います。

今、気候変動というのは、人間による地球の温暖化というのが問題になっています。これはたかだか百年で温度が数度上がるということで、これは非常に大きな問題になっていますが、長い時間で見ると、気候の温暖化と、寒冷化の繰り返しが見られるというのが、一つの大きな特徴です。最終的な氷期というのは約1万年前に終わり、そして今は間氷期に入っているわけですが、氷河期にどうだったかは、植物などにも大きな影響を与えているのです。

なぜかという、イギリスなどでは氷河期には全部、ほとんど氷河に覆われていて、氷河に覆われない陸地は、南の方にちょっとあるだけでした。その南の方も寒いですから、ツンドラのような植物で、いわゆる冷温帯とか、暖温帯とかの植物というのは、イギリスから追い出されたのです。日本は幸いにして、氷河はありましたが、あったのはごく一部で、寒くなっているから当然寒冷な植物が多かったのですが、温暖のところにある植物は南の方に逃げることでできて、また氷河期が終わったら元のところに戻れたのです。

そうして、結果的にイギリスと日本を見てみますと、植物の種はイギリスが1443種、日本が4022種と、種の数が圧倒的に違います。それから地域の固有種は、イギリスは1.2%、日本は34%と、非常に大きく違う。

従って、イギリスは、植物がもともと不足しているのです。不足しているから、これを何とか補おうと、江戸時代とか明治の初期に、プラントハンターという、植物をわざわざ集めに来る人が日本にやってきて、それでいろいろなものを集めて、イギリスで緑化をしたりしたわけです。今のイギリスではアオキが非常に重宝されております。これは冬、ほとんどの植物が葉っぱを落とすから、なかなか庭も見映えが悪くなるので、冬も青々と葉っぱを付けるアオキが好まれているのですが、これなども当然ながら、日本からプラントハンターが持ち込んだものです。そういうことも、私たちの環境を考えるとときには頭の中に入れておいた方が良くはないかと思っています。



〇こういうことを考えていきますと、来年、名古屋で生物多様性条約の第10回締約国会議があつて、これからの生物多様性をどうするかが非常に大きな話題になりますが、そうい

うことを考える際にも、やはり地域によっていろいろ考え方が違います。まずその地域の現状を知った上で、これからの緑の保全戦略を考えていくことが、大変重要なのではないかと考えているのです。

日本でそういうことを考えると、私はやはり里山の問題が、大変大事ではないかと思っています。里山にはいろいろな特徴があるわけです。もともと里山は、エネルギーとか資源をそこから得る場であったという、一つの大きな特徴があります。それが今、利用されなくなったので、里山の放棄というのが問題になっていて、良好な里山を守っていくために、どうやって人が手を入れ続けられるかが、今話題になっているわけです。



里山のもう一つの大きな特徴は、氷河期の日本ではどちらかというと落葉の林が中心の植物のまとまりだったのです。そのときに大陸と一部、陸続きですから、大陸からいろいろな植物がやってきたのです。そしてそういうものが日本の中に定着したわけですが、これが温暖になって、全部常緑の林になってしまうと、そういうのはみんな絶滅したはずなのです。ところが縄文のころから、里山的な手を入れ始めましたから、関東でいうとクヌギやコナラの林、関西などだとアベマキのような林、冬に葉っぱを落とすような林が今でも維持されているわけです。

ですから、そのような林の中に、明るい環境で光を好む植物がいまだに生育することができるわけです。例えばカタクリのようなものとか、ニリンソウのようなものです。こういうものを守るということが大事だということになれば当然、そういう明るい林を維持していくと必要です。

思い起こすと、もともと里山というのはエネルギーとか、資源の場だったわけです。そういうものを放棄して、エネルギーは石油で賄おう。肥料は化学肥料にしよう。そして資源は、日本には70%近い森林面積を誇る森林があるのに、8割の木材を海外から輸入するという状況になっているわけです。これでは決して、サウジアラビアを石油依存の国だというふうに、われわれが一方向的に非難することはできないわけです。まさにわれわれこそが、今の石油依存の社会を形成してしまっているのですから、里山のような環境の中でもう一度、資源エネルギーを利用しながら、同時に生き物も大事にしていくという形の社会変革は、これから考えていくということが大事ではないかと思っています。

私はもう、だいぶしゃべってしまって、少しは延びてもいいと言われたのですが、このへんがそろそろ限界のように思います。もうちょっとお話をしたいのですが、またあとで、時間があったらお話をさせていただきたいと思います。これで終わります。どうもありがとうございました（拍手）。

（原田） ありがとうございます。後半で時間があれば、続きを紹介していただきたいと思います。では続いて佐藤さんをお願いします。

（佐藤） ご紹介をいただきました佐藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は農学をやってきたものですから、農業とのかかわりで今日のお話をしようと思っております。ここに書きましたような、農業と大地とのかかわりというようなことについて話をせよ、というのが多分、原田さんの私に対する宿題ではないかと思って、そのような話をさせていただきます。

最近、新幹線に乗っていると、天気予報や、スポーツニュースなどのテロップが、各車両の入り口にある電子掲示板に出てきます。そこには、民間企業がいろいろな宣伝文も載せています。あれは実に面白くて、その会社の個性がよく出ています。

どことは申しませんが、“人間というのは技術でもって何でも解決できる”というようなことを言う会社が中にはあります。関係者の方がいらっしゃったら申し訳ないですが、それは、果たして本当なのでしょうか。

そのようなことを考えるのが多分、21世紀の環境観ということかと思って、今日はそれを、農業というものに置き換えて、少し日頃考えていることをお話ししてみたいと思います。

例えば、スライドに書いた「水さえあれば農業はできる」。人類はさっきの原田さんの説明ですと、大体1万年くらい前から農業という生業を始めています。そして、そのころから足りなかったのが、水なのです。水があったら何とかなるのになあと、人間は1万年間考え続けてきました。しかし、どうもそこが良くなかったというか、そこに問題があったのではないかというのが、私の一つの結論です。



○「水さえあれば農業はできる」のか？ということですが、世界を歩いてみますと、もちろん水がないところもたくさんあります。しかし水がありすぎて困るところもあるのです。



○これは、タイのバンコク郊外の浮き根という特殊な稲を植えた畑です。女性が船で水上を渡っていますが、この写真を取ったのは11月で、これが1月、2月になると、水は完全になくなり、土地が露出します。そして4月になりますと、また農民はその土地に種をまくわけです。4月、5月になって雨季が始まると水がたまり、恐らく水が一番深くなるのは9



月、水深は4mくらいになったりもします。写真は11月ですので少し落水してきておりますが、それでも2mくらいの深さがある。こういうところでも人間は農業をやってきたわけです。水さえあればといますが、水がありすぎるとこういうことになる。

右の写真をよく見てみますと、水がいっぱい環境でございます。ごらんになれましょうか。この稲が生えております下の方、ちょっと色が変わっています。これは水が澄んで、そして水中にある植物体が見えているところです。こういうふうな、水深が2mから4mにも達するような水の中で、稲は生育し



ているわけです。ですから、この場ではもちろん、人々は稲を作っていますが、稲ばかりが生息しているわけではありません。当然、魚やいろいろな昆虫、動物もおります。この土地の人々はそういうものを全部頂いて、食べてきたわけです。

私は去年、『米と魚』という本を編集しましたが、これはこういう土地に暮らしてきた人々が、単に米だけを作っているという意識ではなく、米と共に、そこに生きる動物、動物性たんぱく質も一緒に頂くのだという、そういう価値観を持って暮らしてきたということを、私はまず申し上げておきたいと思います。

これが現代日本には完全に失われています。田んぼというと稲を作るところです。稲以

外の植物は雑草といって、除草剤で除けられる。それ以外の動物は害虫などと言われて、これも薬で除けられるというのが現代の日本の農業であります。こういうやり方で生産を上げてきた、原田さんの言葉を借りますと、産業革命以後のわれわれのものの考え方を、もう一度見直そうではないかということです。

○こちらの図の背景は人工衛星からの画像で、写っているのは大阪府の一角になります。大阪府の生駒山の麓に、池島福万寺という遺跡がありますが、私どもは、ここで3年にわたって、当時の人々がどういうことをやってきたかということをいろいろと調べてきました。もう、様々なことをやってきて、それをスライドに、書いてあります。



ところがこれを調べてみると、図のように、すべてのあらゆることがつながっているのです。ここに黄色の文字で雑草というふうに書きました。この雑草一つを取っても、なぜこれが増えたかという、それは洪水が起きたとか、もういろいろなことが、ネットワークのようにつながっていて、一つの、現象の輪のようなものを作り出しています。これが、われわれがこの大地の上に住んで、農業というなりわいをやっていることの原因と結果の総体になります。つまりこういうネットワークの中で、私たちは生産性を上げたり、あるいは洪水によって家や屋敷を失ったり、さまざまなことを全部やってきて、いろいろなものが全部つながっているのだということを私は申し上げたいと思います。

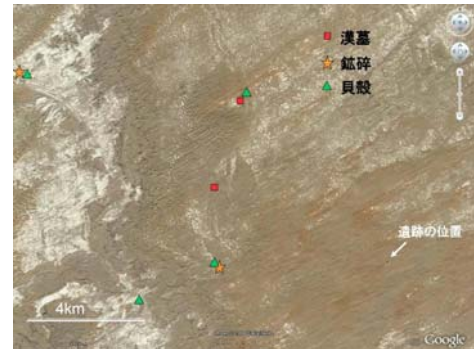
○それから、この農業と水ということを考えた場合、もう一つ指摘しておきたいと思うのは、例えば気候変動によって砂漠が生じた、だからそれはもうしょうがないという考え方についてです。気候変動というのは、西洋的な価値観に従うと、これはもう、神様の下され物になります。われわれは其中で一種のなりわいをしてきたのであって、その結果はどうしようもない、受け入れなければ仕方がないものだという事になるように思います。



ところが、砂漠の真ん中、これは、中国のタクラマカン砂漠という砂漠の中の、一つの

遺跡の写真です。今から 3000 年前。20km 四方、周囲には何もありません。砂、砂、砂の連続であります。

○人工衛星の画像で見ると、右図のようになります。遺跡は写真の右下の方にあるのですが、そこから 10km、20km 旅行してみますと、いろいろなものが見つかります。



例えば赤い四角で示した場所は漢の時代のお墓です。今から 2000 年前の墓が、こういうところから分かるのです。それから緑色の三角で示した場所から貝殻が見つかりました。砂漠の中に貝殻があるのです。これはなぜだろうと。答えを先に申し上げてしまいますと、実はその貝殻がいた時代に、ここには大量の水があったのです。これはほぼ間違いありません。それから写真左側の方にすじのようなものがあるのがお分かりでしょうか。これは川の跡です。70 年くらい前まで、ここには川があったということが、いろいろな証拠から明らかになってきております。ということになると、どうもこのそばには森林があったかと思われます。

○それでは砂漠の中に森林があったのかということで、いろいろ調べてみますと、遺跡からは小麦の種が出てきたり、牛の毛皮が出てきたり、つまり農業があったということになります。約 3000 年前です。



○それからこれは棺桶なのですが、棺桶があるということは、木があった、森があったということになります。よく調べてみますと、そのほかにも鳥の羽は出てくるわ、大山猫の毛皮は出てくるわ、先ほど申しましたが貝は出てくるわ、それからいろいろ文献を調べてみますと、トラはいたわ、どうもこの砂漠の真ん中には、食物連鎖を構成するような森があ



ったのです。何が言いたいかと申しますと、砂漠化というのは、人間の農業という営みによって進行するということがあり得たということをお願いしたいのです。人間が気候変動によって、もろもろの生業のスタイルを変えてきたというのも一面では事実ですが、反面では人間はもう、何千年も前から、気候を変える、砂漠化をもたらすというような、そういうことをやってきたのです。そういう歴史をやはりちゃんと見ないといけないということを申し上げておきたい。21 世紀の環境観を考える上においては、こういうことも考えたいということが一つです。

○今ごらんに入れておりますのは貝殻です。正真正銘、砂漠の中にあった貝です。これはいろいろ調べてみますと、淡水性の貝だということが分かってまいりまして、昔ここに水があったということになるわけです。



○いろいろなプロセスがあつて、地面の表面に塩が吹きしました。白いのは塩です。塩が吹いて、これで農業ができなくなった。まあずいぶんなことをやってきたということになります。



○3 番目の話題です。

この 40 年間に私たちは、食生活をずいぶん変えてしまいました。40 年前までは、先ほど申しましたように、米と魚、大地に根ざした生態系の上で、われわれは食生活を営んでまいりましたが、この 40 年間にわれわれは何をしたか。米の消費は半分になりました。何が増えたのでしょうか。皆さん、小麦だと言われます。小麦の消費量は増えていません。野菜は減った。果物、ちょっと増えた。何でしょうか。言うまでもないですね。畜産品が増

Wants か Needs か・・・？			
1965-2005			
米	112kg	→	61kg
小麦	29	→	32
野菜	108	→	96
果物	29	→	43
畜産	58	→	137
(うち乳製品)	38	→	92)

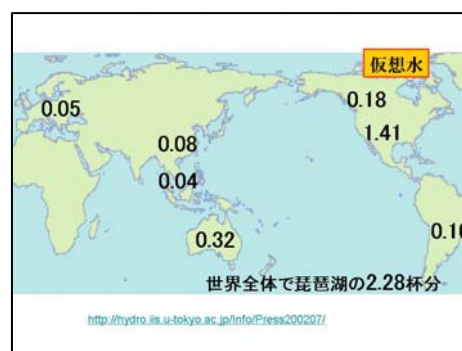
えたのです。米中心の食生活をやめて、われわれは食の欧米化に突っ走ったわけです。

なぜか。これが新しいから、これはいいことだから、と言われて、学校給食などを通じて、食の欧米化をやったわけです。しかしそれは本当にわれわれの食生活、命をつないでいく上で必要なことであったのか、それともわれわれの、単に欲望に根ざした変化に過ぎなかったのか。経済学の古い言葉に立ち戻ってみますと、Wants と Needs という、非常に古い価値概念でございますけれども、もう一遍、ここに立ち返って、本当に必要なものは何かと、本当に生命の維持に必要なものは何で、それ以外のものは多少の我慢が必要か、というようなことも考える必要があろうかと思います。

○牛丼の写真のつもりです。一杯の牛丼を作るのにどれぐらいの水が必要かという計算をした人があります。一杯の牛丼を作るのにも、食材の多くを輸入しているわけです。その輸入食材を作るのに、どれぐらいの水が要ったかということを経済学で計算してみたわけです。そうすると、720kg、風呂桶 4 杯分の水が必要だったということです。一杯の牛丼を食べると、外国の水、風呂桶 4 杯分の水をわれわれは消費していることが分かります。



○日本全体では、琵琶湖の 2.3 杯分の外国の水を使って、私たちは現代の食生活を維持している、こういう計算になるわけでございます。これをどうするのか、こういうことについてわれわれはどう考えるのか、というのが 21 世紀の価値観として重要なポイントだろうと思います。



○こちらは、カンボジアのアンコールワットの写真です。1998 年に私は初めてここに参りました。脇寺の一つに、こういう光景がございました。崩れかけた寺院の建物の上に、巨樹が根を張って、そして建物を破壊した姿です。これを見て、ユネスコあるい



はヨーロッパの人たちは、これを修復しないといけないと言ったのです。修復というのはどういうことかという、この木をどけて、寺院を元の姿に戻すことです。しかし、それは本当に修復でしょうか。私はこの話を聞いたときに、ではこの上に生きながらえた樹齢数百年の木の命はどうなるのかということを先に考えました。

遺跡の修復を考えると、ある文化の人々はその遺跡を「破壊」した森林をどけて、元の建物を復元することを修復だと言います。しかし考えようによっては、それはそこにある森林を破壊することにもつながる。ですからちょっと考えると、カンボジアの国としては観光資源を呼び戻すのにいいというふうに思っているかもしれませんが、よくよく考えてみると、われわれのように森に生まれた民としては、こういうものを単に壊してしまって、木をどけてしまって、建物を復活することを100%良しとするのか、あるいは森の生命力というものをもう一度思い起こすために、この姿をこのまま保存するのが良いのかと、そういうふうな議論をしても良いのではないかと、私はこのときに強く感じました。

というようなことを申し上げまして、私の話を終わりとさせていただきます。どうもありがとうございました（拍手）。

（原田） ありがとうございます。次は内山さん、願います。

（内山） 私は、パワーポイントはありませんので、耳だけでございます。

私の問題意識としては、皆さま誰でも振り返っていただくと分かるのですが、今から30年前とか40年前とか、そのころは環境問題というものに対して、あまり熱心な人はいなかったのです。環境問題のような言葉があっても、それでは飯が食えないとか、そんなことを言うような人の方が圧倒的に多かった時代、それが30年前とか40年前とかいうときだろうと思います。その時代と比べますと、今、私たちは環境が大事だということもよく知っているし、また、細かいことは分からなくても、私たちの地球の環境というものが、だんだん危ない方向に来ているということも、かなり多くの人たちが知っている時代を迎えた。

ただ知っているにもかかわらず、実は行動は大して変わっていないというふうに、私自身は考えています。それは先ほどの話にもあったように、やはり、別に牛井に悪口を言うわけではありませんけれど、日本中、どこに行っても牛井屋が増えていく。それはやはり、それだけ需要があるわけです。つまり環境についての知識は増えてきているはずなのに、

ではどれだけそれに対応した行動が起きているかという点、実に心もとない。それは自分自身を振り返ってもそうであるわけで、私も実は、それほど環境にいい生活をしているわけではないというのが、一面でございます。

ただその一方において、私自身はこの40年間くらい、半分は群馬県の上野村という村で暮らしてまいりました。上野村では150坪程度なのですが、畑を作ったり、裏山が少しありますので、たまに裏山の木を切ったりして、そして手入れがてらですけれど、その木で、私の家はいまだにお風呂が薪でございますので、薪は重要なわけです。燃料として使っているといいますか。たまには炭を焼いたりして、こちらはいろりで使ったりいたします。だから上野村にいますと、別に上野村で環境にいい暮らしを考えているわけではないのですが、ただ上野村で、はっきり言えば楽しく暮らしているだけなのですから、結果としては東京にいるときと比べると、はるかに環境には良い暮らしをしているというふうに言ってもいいのかもしれないと思います。

どうしてこういう差ができてくるのか、ということなのです。今、日本中、どこの農山村に行ってもそうなのですが、畑を作りますと、動物に荒らされるという時代を迎えております。私も8月の初めにジャガイモを、今年は豊作で、400kgくらい取ったのですが、収穫できるかどうか、ギリギリまでよく分からなかったのです。というのは、年によって、実はゼロになってしまった年もあって、それはイノシシが出てきて全部食べてしまったからゼロになったわけで、今年は出てくるかなどうかなと。幸いにして今年は出てこなかったもので、豊作だったのです。

イノシシが出てきたり、シカが出てきたり、サルも出てきますけれども、こういう現象が一般化したのが、うちの村ですと、今から大体20年くらい前でした。その20年くらい前に、最初に畑を荒らし始めたのはイノシシだったのですが、イノシシが出てくると、イモ類、それから豆類を根こそぎ食べてしまいます。私は農業で生計を立てているわけではありませんから、取られたら取られたで笑っていてもそれで済んでしまうのですが、笑っていても済まない人たちが当然、村にはたくさんいるわけです。その人たちが顔をあわせると、畑の何がやられたとか、そんな会話をするようになりました。

そのころ私の畑も被害が出ておりましたので、村の人たちが盛んに言っていたのが、落とし穴を作って取れと。イノシシというのは必ず同じところを歩いてくるので、そこに落とし穴を作ると簡単に取れるからと言うので、ずいぶん勧めてくれました。ところが勧めてくれる人たちが実は、作っていないのです。自分のうちも被害が出ているのに、作って

いないのです。これは面白いなあと思って、いろいろな話を聞いていたのですが、結局、動物と人間の関係というのは非常に、矛盾した関係になっているのです。

今、私たちは村とか地域とかいう言葉を使いますと、人間の世界をなんとなくイメージしますが、伝統的には村とか集落という言葉は、人間の世界ではなく、自然と人間の世界です。ですから自然界の生き物も、村の構成メンバーになりますから、村の人間が考える動物というのは、まず第一に村の仲間なのです。ところが村の仲間なのだけれど、畑を荒らしたりしている限りは害獣と言わざるを得ないわけです。ところがその動物たちというのは冬場になると猟の対象になるのです。これは昔からやってきましたので、このときには狩猟の対象になる。にもかかわらず、その生き物たちは人間たちから大変尊敬されていて、人間以上の知恵を持っている、強い生命力を持っている、そこでは大変な尊敬も受けているわけです。それから一部の生き物になってくると、神様の使いという、さらに高い地位を得ているわけです。

ですから自然と人間の関係というのは、害獣という関係でもあり、村の仲間でもあり、そしてまた狩猟の対象でもあり、ときには神様のお使いでもあるという、どう考えても調和できない、そのすべてが真理として村ではつかみとられている。そしてそのたくさんある真理の中で、そのときの状況に応じて、どのへんで折り合いをつけるか、つまりどこらへんで調和をさせていくか、それが長年培ってきた村人の知恵だというわけです、そういう誇りがあるわけです。ですから畑が荒らされているからといって、害獣だけではないのです。やはり仲間だし、尊敬の対象でもある。だからどういう手を打ったら、その全体の折り合いが上手にできるか、絶えずそういうふうを考えていく。だから自然と人間の関係というのは決して、一つで整理されているわけではなくて、矛盾だらけです。矛盾だらけだから、今の時点ではどうしたらいいか、折り合いをつけるという、そういう発想なのだろうという気がします。それは村の自然、動物以外に対してもすべて言えるわけです。

大体日本の社会というのは、今でも行っている地域は聞いたことはありませんけれど、昔の言い方をしますと疱瘡、天然痘ですが、これが昔の社会では大変人間には怖かったのです。今、WHO（世界保健機構）が、疱瘡というか天然痘は絶滅したというふうに一応宣言しておりますけれど、かつての日本で、死亡率の非常に高い病気でした。疱瘡は伝染病ですから、疱瘡菌に入ってきてもらっては困るということなのですが、かつての社会ではどんなふうにしていたかということ、疱瘡の神様を祭って、疱瘡の神様に村から出て行ってもらう儀式というのがあったのです。それは藁で船のようなものを作りまして、そこに疱瘡の

神様を乗せまして、村の入り口に祭って、村から出て行ってくれと、それをお願いするということです。

ただし実に、一面でばかばかしいのは、同じことを隣村もやっているわけです。ですから隣の村に追い払っても、その隣の村もまた追い払ってきますから、結局これでは疱瘡の神様は退治ができないわけです。それを見ていて非常に面白いのは、人間にとっては悪霊そのものであった疱瘡というものが、神様であったというのも驚きなのですが、しかしそれをまた、退治しようとはしていない、出て行ってもらおうとしているだけなのです。

戦後のある時期には一部の学者から、こういう態度が日本社会の悪いところだ、悪を絶とうとせずに、いい加減に出て行ってもらおうとする、しかも隣村同士でもお互いに出て行ってもらおうとする、これが日本社会の駄目なところだと、こういう非難を浴びた時代もあったのです。実はそういうことを含めまして、私たちは絶えず、どういう折り合いをつけるか、つまり自分たちに都合の悪いものでも、完全に消し去ってしまうのではなくて、そことの調和点を考える、けれど困るから、出て行ってほしい。しかしそれは人間以上の力を持っている天然痘ですから、神様として奉ってもいるという、実に微妙な対応をしていました。

こういうことというのは、村におりますと非常によく分かります。というのは先ほども言ったとおり、私も 150 坪程度の畑を作っているのですが、今の季節、今晚また村に戻ろうかなと思っているのですが、秋野菜というか、冬に収穫する野菜といえますか、その最後の間引きなどをしなければいけないころです。つまり大根とか白菜とかです。以前ですと、私の村は標高が 600m くらいありますから、11 月 10 日までには全部収穫せよ、と村の人によく言われたのですが、最近は暖かくなってしまって、お正月くらいまで大丈夫と、ずいぶん気候が変わってきております。ですから今ごろになって、最後の間引きをして間に合うということなのです。

農業を少しやっていると、よくいろいろな人に、農のある暮らしっていいですね、なんて言われたりします。確かに悪くはないのですが、やはり一面ではこれも、矛盾だらけなのです。というのは今、間引きをしようということです。間引きというのは何かというと、育ちの悪いものは取るということです。つまり、育ちの悪いものは、はっきり言えば、殺すと言ってもいいです。これは考えたら、とても悪い思想です。もしこんなことを人間に当てはめたら、とんでもないことになってしまいます。人間に当てはめたらとんでもないことを、自然に対してやってもいいのか。つまり、どんなに育ちの悪い植物だって、

やはり一生を全うしたいわけで、それを人間の都合で間引いていくというのです。農業をやっていると、こういう矛盾を非常に感じます。それでわれわれは、一体何をやっているのだろうか、本当にいいことをやっているのだろうかということを実際には感じたりいたします。

結局日本の社会というのは、そういう矛盾を絶えず抱えながら、そこで人々はどう生きるかということを絶えず考え続けてきた歴史だったというふうに思っています。先ほど、環境の知識は増えたのに、行動に行かないではないかと言いましたが、結局は、知識でとらえた、つまり知性でとらえた自然というものは、やはり知性でしか見えない自然という、やはりそこに一つの限界があって、それに対して、村の人たちがとらえている自然というものは、知性も働きますけれど、それ以上に体でとらえている自然、身体でとらえている自然なのです。

それからもう一つは、どういう言葉を使ったらいいのかよく分かりませんが、昔、仏教学を研究していた鈴木大拙という人がいましたけれど、その人の言葉を使えば、幽霊の霊ですけれど、霊性ということです。鈴木大拙も、霊性というのは、霊魂が存在するという意味で使っているわけではなくて、知性でもとらえられない、身体性だけでもとらえられない、もっと奥にある、生命でつかむものみたいな、そういうようなものを霊性と呼んでいました。やはり村の人間たちが体を動かしながらつかんでいるのは、そういう、霊性と言っていいのかどうか分かりませんが、自分の生命で相手の生命をつかんでいくという、そういう世界だったと思われるのです。そういうものを持っているからこそ、そこに人間以上の力のある生命を感じていて、それはときには痠痛までそうだったわけですが、そこに神を見いだして、そして神を見いだすことによって、ある種の調和点を作ろうとしたといいますか、そういう歴史でもありました。

ですから私自身感じていることは、先ほどの先生方がおっしゃったとおり、自然のとらえ方というのは、地域によって違うし、それは国ということでも違うけれど、国だけというのも乱暴な話であって、もっと地域、地域によって、すべて違っている。だからその地域に適した自然と人間の関係がある。ではそれが日本の地ではどんなふうに展開したのだろうかというふうに考えてみると、知性、身体性、霊性と言っていいのか生命と言っていいのか分かりませんが、そういうようなものを、全体を調和させながら、そこに最後は日本的自然観みたいなもの、あるいはその地域の自然観みたいなものを作りながら、ときにはそこに祈りの気持ちも持ち込みながら、そうやって長い間、調和してきたのが、自

然と人間の関係だったのではないかというふうに思っております。

私の方は時間ぴったりで終わらせていただきます（拍手）。

（原田） ありがとうございます。続いて小清水先生、お願いします。

（小清水） こんにちは、小清水です。

今まで4人の人たちが、学問的な話をしてこられましたので、これからの15分は、ちょっとコーヒブレイクというぐらいのつもりでお聞きいただきたいなと思います。

私は彫刻をやっております、普段、木とか石とか鉄とか、そういったものを相手にしているものですから、大体普段は言葉を使わなくて済むのですが、話をするにしても、大体学生が相手です。学生たちは今、平成生まれの子供たちです。平成生まれの子供たちには、昭和生まれの私のような人間の言葉がなかなか通じないものですから、全く違う言語体系で彼らは生活しているような気がするのです。ですから、普段はほとんどしゃべらない。でも今日、この会場では平成生まれの方はほとんどおられないという気がしますので、もしかすると、言葉が通じるかもしれないなという期待を持ってお話をします。

（以下スライド併用）

○今、スクリーンに映っておりますのは、これは1968年の、ちょうど今ぐらいの時期に、神戸の須磨離宮公園というところで、第1回の野外彫刻展が開かれまして、そこに私の仲間であった関根伸夫という作家がプランニングをした作品、これは「位相―大地」という



タイトルです。位相というのは位相幾何学というふうなときに使う、その位相、Phaseです。大地は文字通り大地でして、これは写真で見ていただいてもお分かりかと思いますが、右手前の方にある場所を掘って、その掘った土をそのまま左手の方に、そのまま積み重ねていく、積み上げていくというような、そういう作品です。ほぼ深さが2m70cmちょっと、それから直径が多分、2m10cmぐらいの、そんな感じだったと思いますが、そういうものを9月の終わりぐらいに仲間たち、関根伸夫とそれから私と、吉田克朗という作家と、それから櫛下町順子という女性と、上原貴子という女性と5人で、人力でずっと掘って積み重ねていった作品です。

こういう大地などというタイトルの作品を作った経験があるから、こういう場所に来てもいいのかなと思いつながら来ましたが、どうも場違いだったかなあ、というふうにずうっと後悔しております（笑）。

この夏の間、ちょっとテレビを見ておりましたら、NHK でしたか、どこか中東の方の海岸にいる、ユウレイガニという、カニの生態の映像が映りました。それが浜辺で自分の巣穴を掘っていく、小さなカニなのですが、大体深さ 1m くらいまで、実に複雑な形で掘って行って、その掘った砂を巣穴の入り口の前に、どんどん、どんどん積み上げていく。本当にピラミッドを作るように積み上げていくというような映像がありまして、41 年前に作ったこの、「位相―大地」と全く同じようなことをしているカニがいるんだなあと思いました（笑）。そのカニは何か、自分の巣穴にメスを呼び寄せたいがために、いかに美しく砂のピラミッドを作っていくかというふうなことをやっているらしいのですが、彫刻家も大体似たようなものでして、女の子にもてたいというふうな気持ちが根底にあって、こんな穴を掘ったり、土を積み重ねたりしているわけです。

この「位相―大地」の話から、ちょっと現代の平成生まれの若者たちがやっていることまで、ちょっとお話をしたいと思います。

○これは穴を掘り始めたところです。場所を決めて、穴を今、掘り始めております。こういうふうにどんどんと、人力で掘っているわけですが、この腰の高さぐらいまでのところは、それほど大変ではないのです。掘った土を上げるのも、それほど苦労ではないのですが、だんだん・・・。



○これは今度、土を重ねるための場所を今、決定しているところです。積み上げる場所を決定しているところです。積み上げる場所に、こういう支柱を立てまして、これに荒縄を巻いて、動かないようにしながら、こうやって内側にベニヤ板を貼り付けて、その中にどんどん土を入れていく。そして突き固めたり、水をかけたりしながら積んでいくわけです。

これが外にはじけ出さないように、今、荒縄を一所懸命巻いているところでございます。



○穴も人間の背丈ぐらいになりますともう、土を上にはり上げるのは大変でございまして、公園の土木作業に来ていたおじさんが、ついに見かねて手を貸してくれている状態で、彼らの手助けがなければ、恐らく期日、期間中には作れなかったのではないかなと思うくらい、大変ありがたかったです。



○ついに最後には、クレーンが来てくれまして、穴の底の土を機械で引っ張り上げて、そして上に、この上に持ち上げてくれるということで、どうにか進みました。

右の写真の右手前にあります何か台のようなものは、



実に浅はかな考えといえますか、これにつるべ井戸のように作って、穴の底から土を引っ張り上げようとわれわれは試みていたのですけれど、やはりクレーンの力の方がずっと強かったということです。人間の力の弱さをつくづくと感じました。

○右の写真は完成して、周囲のベニヤ板をはずした瞬間です。ここにいる、このやせこけた若者たち、私もいるのですが、この人間で作ったということでございます。

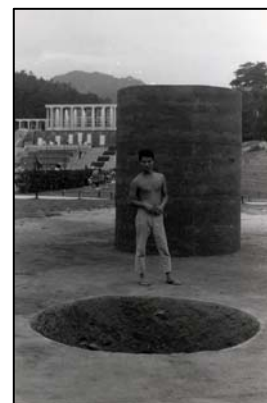


右下は最後に枠をはずしたところですが、この瞬間というのはとても、なんといいますか、この作業をしていた、こういう行為が果たして芸術と言えるのだろうかということを、どこか疑いながらずっとやっていたものです。しかしこの枠が外れた瞬間に、それまでの、ずっと土を掘って積み重ねて、という作業をやって、宿舎にしていた国民宿舎があるので



すが、そこで飯場のような状態で、5人のメンバーで毎晩話をしたり何かしている、そういった経験が、この枠を取り去った瞬間に、一瞬にして、すべて了解できたというような、そういう記憶があります。そういう、芸術表現は一体なんだとか、これが彫刻なのかとかという、そういう議論よりも、穴を掘って積み重ねてという、そういう、本当に原始的な行為、その行為そのものが、先ほどの話にもありました、体で感じる自然というふうなことで、通じるのかもしれませんが。本当に理屈ではなくて、体を通してすべて了解できたという、そういう瞬間がありました。それはいまだに、41年たった今でも、私にとってはとても大事な記憶になっております。

○これが実は、その関根伸夫さんという、私の二つ年上の作者です。彼が最初にこういう作品を作ろうと思うというふうにスケッチを持ってきたのは、ただ、それこそ子供が落とし穴を作るように、掘って、掘った土を横にお椀型に積み重ねてあるというような、簡単なスケッチを持ってきてくれたのです。いろいろと皆で議論をして、討論をして、ようやくこういう形に作ったというものです。



○それで、これから私の作品です。先ほどの「位相一大地」を作った、次の年に私が作った作品で、これは手漉きの和紙で作った袋の中に、2t くらいの御影石が入っている、そういう作品です。



○これは鉄板を削って、カンナの刃のようにした作品です。



○これは竹橋の近代美術館の前庭のところに 20t ほどの石を運びまして、それをその美術館の前でただ割ったと、そういう作品でございます。



○それからこれは、先ほど「位相一大地」を作った、須磨離宮公園で、2 年か 3 年後に私が作った作品で、これは信楽の粘土を積み重ねて、壺を伏せたような形、ぱっと見は地球のにきびのような感じで出ておりますけれども、これはテントを張って、雨に当たらないようにして作って、そして完全に乾燥してからテントを取り払ってこういうものになりました。これは展覧会期間中に雨に打たれたり、観客がバットで殴ったり、いろいろなことをして崩れて、最後には土饅頭になっていくという、そういう作品でございます。



○それからいろいろな素材を私は使います。水も彫刻の素材に使っておりまして、これはテーブルの上をちょっと掘りくぼめて、そこに水がためてありますが、大体、バケツ一杯くらいの水がテーブルの上にあります。



す。

○こういう作品もあります。焼き物を焼いて、浮きをちょっと浮かべたような作品です。もう3分前ですけども、あと15分くらい必要かもしれませんので、ちょっと我慢をしてください。



○これも自分で焼いた焼き物です。信楽の穴窯で焼いたのですが、そこに水を張って、釣り糸を垂れて石を釣っているという、「石釣り」というものです。



○こういう、ケヤキの木を使った作品、テーブル状の作品もございます。



○これは「飛ぶ形」という作品ですが、石に木の羽が生えております。



○これは同じように、「鳴る形」という作品ですが、石に木をくっつけてまして、全体で琵琶のような雰囲気です。ちょうど人間の背丈ぐらいの作品で、なんとなく後ろに回ったりすると、女性の後ろ姿を見ているような、ちょっとなまめかしいところのある作品でございます。



○これは見たとおり、斧で石を割る、「割る形」というものです。



○これは青磁です。今日は大地というテーマだったので、土を使った作品のいくつかを写真として持ってきました。青磁で鑄込んだ鉢の上に、今度は松脂と蜜蝋を混ぜたもので上を作っているという、そういう作品です。それがどうしたと言われると困るのですが。



○左下は同じ青磁を使いまして、ずっと並べて、その中に水を張って、そこに浮きを浮かせている作品です。

例えば右下の写真ですね。これは三日月のような形をして、ぷかぷかと浮いております。重りを仕込んでありますので、ちゃんと垂直を保っています。こういうものがずうっと並んでいる作品です。



○これは鳥羽の海の博物館というのがありまして、この建築は内藤廣さんという建築家で、確か今、この近辺に事務所があります。東京大学で教鞭を執っておられますが、彼の若いころの出世作です。そこに何か



ちょっと、彫刻作品を置いてくれという話で、壁に付けてもいいかとか、庭に立ててもいいかとか、いろいろ相談をかけるのですが、建築家というのは、何か自分の作品を、自分の作った建物を汚されるのがいやらしくて（笑）、私に作品を作れと言っておきながら、そこも駄目、あそこも駄目、そんなところに作らないでくれと言うのです。結局この池の中に沈めて、水遁の術で、隠れてやろうと思ってやったのですが、話と違って、ちょうどこれは本当は水面すれすれに喫水線が来るはず、そういう計画で作ってあるのですが、どうも、この池の底が抜けているらしくて、どんどん水が抜けていくのです。それがちょっと残念です。先日、十数年ぶりに見に行きましたら、今はもうすっかり水がなくなってしまうておりまして、非常に残念です。

○それからこれは、新橋と有楽町の間、東京第一ホテルの横のところにある空間ですが、これは美術館でなくても、普段でも見えます。私の作った作品ですので、今日の思い出に一度、新橋へ足を運んでいただきたいと思います（笑）。



○これは「鷹の井戸」というタイトルで、鷹の精が不老不死の力を持った水を湧き出させる、そういう泉を鷹の精が守っている。そこに小船に乗った勇者が、不老不死の水を求めてやってくるという、そういうストーリーの展開でございます。この手前の船のようなもの、これはベンチになっておりまして、昼寝をするととても気持ちのいいベンチです。これがずっと奥のところにある、不老不死の水を湧き出す泉、岩から掘り出された壺です。これが循環しておりますので、決して飲まない方が良くと思いますけれど（笑）。



○話は平成生まれの学生たちに移ります。私のおりま大学にはちょっとユニークな授業がありまして、複数の学生が自主的にテーマを決めて、授業を立てる。それに賛同する教員が二人以上いれば、授業として単位を認める自由テーマ研究という、そういうものがあ



ります。そこで学生たちが土の家を作りたい、例えばドゴンの土の家のようなものとか、そういう原始的な文化の中にある、何かイメージがあったのでしょうか、土の家を作りたいと。それに手助けしろということで、私ともう一人、井上明彦君という、非常に優秀な先生と二人で見えています。

これは大学のある場所に、現場小屋みたいなものを皆で作って、そこで資料を展示したりとか、掲示したりとか、プランを立てたりとかしているところでございます。

○この夏の間、とりあえず土の家の内部の壁を作ろうと、それを版築という作り方で作りました。これは昔の築地塀を作るようなやり方と同じですけど、それを学生たちがいろいろ研究をして、作り始めたところです。これは土を入れて付き固めていくわけですが、その41年前に、私が経験した「位相一大地」、先ほどの穴を掘って立てるといふことと、ほとんど同じようなことを彼らがやっているというわけです。



○これは一応、最終的な土の家の入り口を入ったところに立てる壁で、空間をちょっと区切るための壁というふうな想定で、これぐらいのスケールで作っておりますが、最終的には今、この石が並んでいる、直径はこれで5mくらいになるのでしょうか、石の部分が土台になって、ここに土を積み重ねていって、最終的に土の家を作ることになっていきます。



○左の写真は最終的にどんなふうになるかということを確認しながら、ちょっと楽しみながら、モチベーションを高めながらやっているところでございます。

右の写真は曲がった木を壁の中に取り込んで、これがベンチになるなあとか言いながら、やっています。



○これが型枠をはずしているところです。土を突き固めて、こういう壁ができました。とってもしっかりしています。叩いても絶対崩れませんし、本当にしっかりした壁が出来上がっております。こんなようなことをして、私が41年前に感じ取ったようなことを、今の学生たちも似たようなことを感じ取るのだろうかと思いながら、授業をやっているところでございます。



○もうとっくに 15 分は過ぎているのですけれど、最後に。

これはイギリスのランズエンドの近くにありますが、ミナックシアターというものの写真をお見せして終わりたいと思います。これは 1931 年ぐらいから、Rowena Cade という一人の女性が、自分の夢を託して、一人で海岸から石を運び上げて、石を積み重ねて野外劇場を作り始めたのです。これはこういうロケーションのところにできているわけですが、下の方に見えますのが舞台ですけれども、手前の階段の方から観客が見るわけです。ここで毎年、今でも夏になるとシェイクスピア劇が上演されております。



○左下の写真が観客席です。左手の芝生の生えたような階段、そういったところに客は座って、演劇を見るわけです。

右下の写真がその、客席から見下ろした舞台の方です。



○これはすぐ横の海岸です。こういうところから石を運び上げて行って、営々と作っていったわけです。



○彼女はもう既に、1983 年に亡くなりましたので、後を受けた人たちがこういう建物を作

って、ここを受付にしたりとか、食堂にしたりとかして、この向こう側に舞台があるわけです。



○こういうロケーション、こういう景色が舞台の背景になって、演劇が行われるわけです。

なぜ、この写真を最後にお見せしたかといいますと、私は一人の人間の夢に向かって、それを、本当に一つ一つ、石を運び上げて、積み重ねて作っていくという、そういう人間の非常に素朴な行為と、それから時間の集積といったようなこと、そういうことがもっともっと大切にされていいのではないかと、そういう気持ちがあるからです。



私は、四国の、南伊予の宇和島というところで生まれ育ちました。その近辺には昭和 30 年代くらいまでは、海岸からずっと山の頂に至るまで、段々畑が作られておりました。それがこの Rowena Cade の作りました舞台、野外劇場の客席のイメージと重なりまして、非常に感慨深く見たわけです。その何十年、何百年とかけて作った段々畑も実は今、全くなくなってしまっております。それがいいのか悪いのか、私には分かりませんが、景色として見られなくなったということは、とても残念な気がしております。

話の内容はお忘れください（笑）。この景色だけ、この景色だけ覚えておいていただきたいと思います。どうも失礼いたしました（拍手）。

（原田） どうもありがとうございました。4 人のパネリストから話題を提供していただきましたが、私が予期した以上に、いろいろな大地のとらえ方がありました。これから議論を進める前に、武内さん、今の話の延長で後半部分をご紹介します。

（武内） 私はもう少し、これからのことをお話ししたかったのです。最後の方にちょっと、それを簡単にまとめて申し上げたのですが、やはりこれから、大地と人間とのかかわりを、もう一回見つめ直してみようじゃないかと。つまり今までは、人間が作ってきた価値観、それから社会システム技術、こういうものによって、大地がどこにあっても、同じ

ような社会が展開できるという価値観だったと思うのです。それが結局文明であり、進歩であると。そういうことがこれからは許されない状況になっていると思うのです。石油産出国ですら、そうだと思うようになってきたのが、私が先ほど申し上げたかったことなのです。

そうなったときに一番大事なことは、それぞれの場所の、大地の特徴を理解することです。例えば、東京は、もうこれは人工だから、人工的な解決しかないのだということにはならなくて、東京であっても東京の自然があり、東京らしい生活というものが本来はあるはずです。そういうものをこれからの社会づくり、例えば、これから高齢化が進んでいきます。そうすると高齢化社会にふさわしい街づくりというものに、大地をどううまく使っていくかを、両者を組み合わせていくことで考える。こんなことがこれからもっともっと考えられていく必要があるし、またそれを考えない限り、21世紀の社会というのは、持続的なものではありませんと思うのです。

それから、内山さんがおっしゃった話の延長線上で、私があえて付け加えるとなると、われわれは自分たちの大地を考えるだけではなくて、世界のほかの人たちの大地の使い方、にも思いをはせるべきではないかということです。私が最後に申し上げたかったのは、途上国の人たちが、本来はその地域の中でいろいろな、大地から学ぶ知恵というものを使って、生活をしていた。それに対して近代化は、それを無視して、開発という名前で総称されるような、一種の価値体系、技術体系を押し付けて、それがうまくいっていないのです。その結果として、結局は非持続的な社会になってしまっている。

そういうときに、今われわれに一番大事なものは、その地域に本来あった伝統的な人々の知恵ですが、伝統的な知恵だけで、今の社会がもはや成り立たないというのも事実です。例えばもう、人口が増えてしまっているとか、食料が不足しているとか、温暖化が進行するとか、そういうことがあるから、やはり、近代的な知恵も必要ですが、その両方をあわせて考える必要がある。近代的な知恵は近代的な知恵でそのままというのではなくてむしろ、いかに伝統的な知恵に即するような形で近代的な知恵、どちらかというと画一的であったものを、むしろ多様なものにしていって、それぞれの大地に、あるいはそこに住んでいる人たちに、ふさわしいようなものに変えていくかです。これは、科学の立場から言うと、より進んだ科学と言えるのかもしれないのですが、そういうものになっていく必要があるのではないかと思います。そういうことを新しい環境観の下で考えていくことは、私たちの未来にもつながるのだ、そういうことを最後に申し上げたかったのです（拍手）。

(原田) どうもありがとうございました。今までの話題に関して、もうちょっと詳しく聞きたいとか、逆にもっと詳しく説明したいという点があれば、おっしゃって下さい。まず佐藤さん、どうですか。

(佐藤) 取っ掛かりとして、今の武内さんの話を借りようと思うのですが、今のは一種の結論ですよ。あれを先に言われてしまうと、後の人は言うことは何もなくなるのです。

私もそれについては大枠、そのとおりだと思いますが、もう一つ、考えておかないといけないのが、一部の人たちは、だんだん地球の上にはいろいろな多様な姿があって、その多様な価値観なり体系があるということに、だんだんと気が付き始めてきた。ところがまだそういうことに気が付いていない人たちがたくさんいて、その人たちが、ある意味で世界を動かしているというところが、やはり一番大きな問題なので、そこをやはり、その人たちを含めて、今、武内さんが話されたことをどういうふうに伝えるかということが、やはり一つのこれからの課題になるかなあと、そんなふうに思います。

(原田) おっしゃるとおりです。私は地質学を学んでいますが、学問の名前で「質」が付くのは地質学だけです。個別的なモノを個別的なモノとして認めていく学問だからです。物理学や化学は、たとえば水ならば、どんな名水でもどんな濁った水でも基本は H_2O というふうに普遍性を求めるわけです。普遍性を重視する自然科学の主流に反して、質という個別性を強調するので旗色が悪い。野外の現場に出かけて行って地質調査だというと、すぐに石油ですか活断層ですかと言われます。

しかし、内山さんのお話はまさしく、群馬県上野村という個別的な土地から何が見えてくるかというお話でした。何か付け足すようなことがあれば、お願いします。

(内山) 近代的な技術、科学、知識、それから伝統的なものというのですか、それを調和させていくということはもちろん大事なのですが、調和させていくために何が必要かということになってくると、僕はやはり近代的なものを一遍捨てることだと思っています。もちろん、近代的なものを捨てたところで、実は私たちの暮らしは捨てられないのです。例えば私だって上野村に行けば電気はあるし、それから今日着ているこの服だって、近代的技術で作られていることは間違いないし、ここに来る移動手段だって、歩いてきたわけではありません（笑）。

つまり、だから捨てるということは、全部ゼロにしてしまおうという、そういう原理主義的な話ではないわけで、自分の気持ちの中で、一遍けじめをつけてみるということだと思うのです。そのけじめがないと、結局調和が見つけられない。どうしても私たちは近代的な技術と近代的な社会で生きてきましたから、そちら側に引きずられてしまうというのでしょうか。ですから、むしろ捨てるというのは、さっき言ったとおり、気持ちの中で一遍けじめをつけてみる。そのことによって始めて調和点が見いだせるという、そんな時期に来ているのではないかなというふうに思っています。

（原田） 小清水先生、何か付け加えることはありませんか。

（小清水） 付け加えることはないのですが、今、内山さんの話を受けまして。さっき、学生たちが土の家を作る写真をお見せしました。あの場所は実は電気がないのです。電気を引いてこようとすると、100m くらいコードを伸ばしてこないといけないものですから、面倒くさいということもあって、電気のない状態で作っています。実際に作業をし始めると、つい、電気のこで木を切りたいと思うのですが、電気がないので切れない。そこで仕方なく皆手でやるというようなことで、やっているわけです。まあ今は電池というものもありますので、ドリルとかいろいろな工具が電池式で動きます。コードの要らないものも結構ありますので、さほど苦労はしていないのです。

私は彫刻家なので、いろいろな道具を使います。しかも最近ではもうほとんどが電気工具なわけです。電気を使う工具ですから、それらを全部取り上げられてしまうと、本当に一瞬、立ち止まってしまう。一瞬たじろいで、さてどうやって作ろう、というふうなことになっていってしまいます。それをあえて、今の学生たちと一緒にやっているところでは、わざわざ電気を引いてこないで、やれるようにやっていこうというふうにやっているのです。これがもしかすると、忘れていたことを思い出させる、私にとっても学生たちにとっても、何かを思い出させる、そういう機会になるのかなと思ったりもしています。

（武内） 環境の話をすると、どうしても説教っぽくなったり、難しくなって、あまり社会に浸透しないので、環境の持っている本質を皆に伝える一つの技法として、アート（芸術）を活用することができるのではないかと私は考えています。私は今、国連大学の副学長をやっていますが、国連大学の隣に、東京ワンダーサイトという芸術家の集団があって、

そこと一緒にコラボレーションしました。私の方は、海流ごみ、漂流ごみの話をしまして、漂流ごみがどこから来ているのだろうか、そういうことを通して、資源循環社会というのはどう作ったらいいかという話をしました。

他方で芸術家に、ごみを使って、いろいろな作品を作ってもらったんです。それで、国連大学の建物の中に、地球環境パートナーシップというところがあるのですが、普段はほとんど人がいないのです。「みんなで地球を大事にしましょう」と書いてあったり、パネル展示とか、そういうのは面白くないので、あまり人が来ないのです。そこで、そのシンポジウムと並行してアーティストにいろいろなものを作ってもらったのです。一番面白かったのが、淀川テックというグループがいて、淀川にあるごみを全部集めてきて、それで巨大なチヌの作品を作ったりとか、それで最後になったらまたそれを解体して、それを魚を下ろすようにまた広げて展示したりとか、そういうことをやっている人たちに来てもらったのです。そうしたら、その建物がオープンして以来、初めて満員になったのです。

そういうものを通して、ごみというものが本当にごみなのか、実は資源を捨てているのか、ということが直感的に分かるのです。ですから私は、そういう芸術の持つ力というのを実感したのですが、そういう観点で、今日の議論も少し発展させていくことができるのではないかと、先ほどの話を聞いて、そういう思いを持ちました。

(原田) ありがとうございます。そういう意味で小清水先生に来ていただいたわけです。芸術は古い歴史を持っています。技術は、250 万年前の石器が出ているので、250 年以上の歴史があります。農業は 1 万年前に始まりました。科学はわずか 5000 年の歴史です。文字と数字が発明されて、初めて私たちは定量的に論理的に考えられるようになったからです。それまでは技術はあっても、体系的な自然理解はなかったのです。一方、芸術は 5 万年前から行われています。しかも、芸術活動を行うのは人間だけです。ハクイアリというアリは、齧りとった葉を巣の中に運び込んでキノコを栽培し、老廃物は巣穴の外に捨てるという、一種の農業を営んでいます。チンパンジーは枝をアリ塚の中に入れて使います。つまり道具の使用ですが、チンパンジーには絵は描けません。先日、象が絵を描く場面がテレビで紹介されましたが、教え込んだからできるのです。人間ならば、誰でも歌い踊れるし、絵が描ける。土が目の前にあれば捏ねてみる。芸術表現は人間にしかできないというのが一つです。

それから武内さんがおっしゃったように、私たちが出しているいろいろな廃棄物をもう

一回使うことはきわめて重要です。先ほど、およそ 30 億年前に初めて地球に遊離酸素が出てきたといいましたが、遊離酸素は光合成の廃棄物です。

植物はでんぷんを作りたいために光合成をするのであって、酸素は別に必要ない。ところが、当時の大気中には酸素がなかったので、嫌気的な生き物にとって酸素は猛毒でした。光合成による史上初の環境破壊です。しかし、生き物がエネルギー生産に酸素を使うと、発酵に比べると約 20 倍も効率が良くなるので、酸素を積極的に使う生き物が出てきました。その子孫が真核細胞の中にあるミトコンドリアです。

いかなる形であろうとも、物を使えば必ず廃棄物が出ます。それを人間にしかできない芸術でもう一回有効なものとして使う。武内さんがおっしゃったリサイクルです。そこに芸術の大きな力がある、と思います。

内山さん、いかがでしょう。上野村の暮らしで、要らないもの無駄なものをなくする、そして使い切る、ということについて。

(内山) 僕が上野村に行くようになったのは 40 年ぐらい前ですけど、それから 10 年間の間は、上野村ではごみの収集はしていませんでした。つまりごみが存在しなかったということです。すべて畑に返す、あるいはたきつけに使うなどしていました。ところがそのうちに、発泡スチロールとか、ビニールとか、畑に返すこともできないし、たきつけに使うこともできないというものが、大量に出てくるようになって、それで今は、きちんとしたごみの収集をしています。

今日では、特殊な利用の仕方は別として、自分たちの生活の中で利用できないごみが大変増えてしまったというわけです。電気製品などはその最たるもので、再利用できない。木の家具だったならば、やろうと思えば、バラバラに分解をして、その部分を再利用するというのは生活の中でできるのですけれども、電気製品などはできなくなっていく。

近代化の過程ではそういうことがいろいろな領域で起きていく。芸術の問題を考えた場合でも、村には芸術と呼ばない芸術がいっぱいあったわけです。例えばお祭りのとき、お神楽を奉納するとか、うちの村では獅子舞を奉納するというのもありますけれど、そういうときのお飾りとか、いろいろな形で素晴らしいものを作ってきた。ただ、これは、なんというのでしょうか、作ったときの喜びとか感動とかを、すべての人が共有する芸術です。だからお祭りのときには、お神楽を舞っている人は数人であったとしても、地域の人々が当然見に行っているし、来年は自分がやるかもしれない。だからそこで共有して、一つ

の芸術がある、すべてが共有されていくというわけです。

ただ近代芸術になってくるとやはり、作った人の喜びを、観客、見る人は共有できない。感動を与えてくれることはできるかもしれませんが、やはりそこにずれができていくというのでしょうか。だから僕などは、半分伝統社会の方で生きているものだから、どうしても近代芸術に対する、一つの疑問みたいなものが出てくる。それは一緒に共有できない、そこにどうしても芸術家の自己主張に、まあそれは仕方がないのですけれど、やはり芸術家の作品になってしまう。この問題も、ちょうど自分たちで処理できないごみが出ていくというようなものと、なんとなくどこか重なって見えたりするのだけれど、意見を聞いてもいいでしょうか（笑）。

（小清水） 私を含めて、みんなでごみを作っているという意識はあります（笑）。芸術なんてごみみたいなものだと思っておりますが、特に彫刻は、その最たるものだというふうに思っております。

話を発展させるようなことが今、しゃべれないような気がするのですが、先ほどの学生たちと一緒にやっている、土の家のプロジェクトの話の続きですけれど、実は私たちは、お金を払って材料とか道具とかをできるだけ買わないようにしようという、そういう取り決めでやっています。例えば土は、近所のお百姓さんから分けてもらう、あるいは土木工事をしている現場に行って、その土を少しくださいというふうに言ってもらってくる、それから型枠に使う板や何かは、ほかの学生たちが使って捨ててしまったものを、大学の中から拾い集めて作っています。それを形にするためのネジ釘、木ネジを買ったりはするのですが、できるだけお金をかけないで、その場で手に入れることのできる材料と、拾って済ませることができるものでやっていこうと。あとはもう人間の、自分たちが持っている力でやるということです。

実際には、例えば先ほどの版築の壁にしても、どこかの建材屋に行って、真砂土を買ってきて、それをダンプカーでどどっと出してもらって、それを積み上げていけば、とても楽だし、きれいなものができるのですが、近所で集めてきた土だと砂利も混ざっているし、いろいろなものも混ざっていますので、そういうものを取り除いてから積み重ねるという作業が必要になってくるのです。しかし、そういうお金をかけない、自分たちで捨てられたものを拾ってきてやるという、その中でどれだけのものができるかということを、学生たちが自主的に体験しようというふうなことで、目的は土の家を作ることなのですが、そ

の過程で簡単に物をお金で買うということをしないということが、平成生まれの若者たちが自分たちに課したことなのです。たくさん人生を経験している側としては、そこはちょっとお金を払ったらもっと楽なのというふうな、そういう悪知恵を授けたいくなるようなときもあるのですが、それをぐっと我慢して見ているというのは、これは結構大変な、私にとっての修行でありますけれども、しかしその結果というものは恐らく、学生たちが得るであろう喜びというのは、とても大きいだろうなというふうには思っております。

(原田) どうもありがとうございます。内山さんが指摘された、共同体で楽しむ芸術。私たちが忘れていた物語ですね。皆で語れるという共通のものが、今は見えにくくなっています。佐藤さんと武内さんは海外調査が豊富なので、この国ではこういう楽しみがあるとか、こういう物語があるといった具体例があればご紹介ください。佐藤さんからお願いします。

(佐藤) 具体例がすぐ浮かびませんが(笑)。ちょっとその前に、内山さんが言われた、皆さんが自分たちのコミュニティというのですか、その社会の中での一種の共感できるものを使って、芸術にしているというのは、私はそれは本当にそうだと思うのです。つまり、生産ですよ、物を作るということ。これは衣食住に必要なものですから、そういう、物を作るというプロセスの中で、しんどいこともあるでしょうし、大変なこともあるでしょうし、楽しいこともあるでしょうし、そういうものを共有する、一種の感覚の発露として芸術というものがあつたと考えれば、私はすごく分かりやすい気がします。

今のそのごみの話というのは、ついここ何十年、世界的に見てもここ何十年のことですよ。そこが完全にもう欠落してしまった。使うために作るのではなくて、誰かが使うかもしれないものを大量に作って、大量に流通させるという、やはりそういう、時代の非常に特殊な現象を言っているような気がするのです。だからこれは歴史的に考えても、あるいは将来を考えても、そうだと思いますが、こんなものが長続きするはずはないので、そういう意味から考えると、私はあまりそのへんについて、悲観的な感想は持っていないのです。これはいやでも元に戻るんだろう、というような感じがしているのです。

それで、原田さんに出された宿題を、しゃべりながら一所懸命考えたのですが、それはまあ、そんなケースはいくらでもありますわなあと言って、ごまかそうと思うのですが、駄目ですかね(笑)。

(武内) 里山や棚田についてお話をしたので、そういうものに対して、どう芸術的にかかわっていいのかについて考えてみます。私のふるさは和歌山県なのですが、非常にきれいな川沿いの棚田が、清水町というところにあるんです。この清水町にある棚田は、すごく細分化されていて、それで誰かが水田耕作をやめてしまうと、全部の風景が台無しになってしまうのです。だから結局、芸術というか、そういう価値がある風景を守るために、皆が力をあわせてそれを守っている。それがあつ時期は何か、強制されてやつていふような感じだつたのですが、それが社会で芸術だと評価されるようになってからは、むしろそれをやることがその地域づくりの核になってきて、地域にとっては誇りになっている。そういうことを私は直接、見たり話を聞いたりしています。これは一種、環境というものと、芸術という言葉を使つていいのかどうかは分かりませんが、皆が守り育てるべき風景が、結びついた例です。もしそれが仮に、今日の話の中にある、皆が参加した芸術だと考えれば、それは能登半島にだつてあるし、フィリピンにだつてあるし、バリ島にだつてあるしと、こういう話になっていくのではないかと思うのです。

それに対して、これは本当にいいかどうかというので、また問題提起でちょっと申し上げますと、私のよく知っている人に、北川フラムさんという芸術家がいます。彼が大地の芸術祭というのを新潟の妻有というところで行っています。これはどちらかというと、一所懸命にみんなが里山や棚田を管理しているのだけれども、そうはなかなかうまくいってない。だから地域起こしをしなければいけないというので、彼が世界中の芸術家に来てもらつて、そして棚田に何か彫刻を施したり、里山の中に芸術作品を置いたりして、何十万人という人を呼んでいるのです。これは先ほど来あるべき姿からいうとちょっと違うのですね。つまり、守るべき環境というのと芸術家というのが、分かれているのです。だけれど北川さんがやっていることを見ると、彼は大変なのです。最初はやはり地元から総スカンだつたと言うのです。そんな、うちの村に来て、よけいなことしてくれるなど。けれど、それがもう何年もやっていると、だんだんと村の人が、ああ、うちはこういうことを行っているんだというふうになって、ますます盛況になっているのです。これはまあ、確かに外部から芸術というものが入り込んできたことではあるのだけれども、それが地域化することによって、人々の中に入り込んでいくことによって、これもまあ、望ましい関係だと言えるのではないかなと思うのです。そのへんはちょっと、先ほど来の文脈から言うとうどうなるのかは、私には分かりません。

とにかく前者の方は、問いに対する模範解答だと思うのですが、後者は模範解答かどう

かは分かりません。

（原田） 地域性を大事にして、地域参加でということですね。そのとき、武内さんがおっしゃったように、地域だけで固まると、それがまた排他性とか他地域に対する無関心を招いてしまう。せっかくグローバルに視点が広がったときに、共同体意識が強まると、地球大に拡大した意識が収縮してしまう危険性があると考えますが、内山さん、そのへんはどうでしょうか。村で過ごしていて、ローカルでありながらグローバルであるというような、何か新しい考え方なり動きなりがあれば、お聞かせください。

（内山） 昔の社会は、どうしても限られた資源を利用して、限られた人員しか生きられない社会だったのです。例えば水田を作るにしても、水を引いてくるとその使える水の量は限定されていますから、するとそこで仮に 50 軒が暮らしていくとすると、60 軒になってしまうと全員が倒れるという、そういう社会でした。それは燃料の、薪の問題でもそうで、限られた山しかなければ、50 軒なら風呂を沸かすことはできるけれど、100 軒になってしまったら煮炊きにも困るというわけです。だからそこから、それをある種の排他性といってしまうえば、そのとおりですが、新規参入者を好まないという風土が生まれた。これは資源量の問題です。ただ、今、資源問題はだいぶ解決がしている、それはいいか悪いかは分かりませんが、薪のようなエネルギーを使っている人は少なくなりました。そういう時代になってくると、制約条件は取り払われてしまうので、実はそんなに自分たちの地域を閉じる必要がなくなっているのです。だから今の村が非常に開放的になってきているのは、一つはそのことがあるということです。

それからあと、グローバルか、ローカルかみたいな形で問題を考える必要は全くなくて、なんというか、ローカル世界、つまり村みたいな世界から見ると、実はグローバルなどというのは悪なのです。だけど悪だといって拒絶するかというと、そんなことはないわけです。悪も受け入れる。先ほどの疱瘡でさえ、神様にして、ちょっと出て行ってもらうだけという、それが日本の伝統だから、これは言葉としては清濁併せ持つということです。清、つまり清い方だけで一色にはしない。悪にも支えられてわれわれは生きていることを知っている。

それが日本の信仰観にも反映していて、例えば純粋に仏教思想などをやっていったら、全員が悟りを開かなければいけないわけですから、清く正しい人しか駄目だということに

なるわけです。だけど仏教というのはどう教えるかという、だけどそこで、欲望を持ったりして、ちょっと仏教から外れたような生き方をしている、あ、それも人間だよというふうに、ちゃんと認めるわけです。本当はこっちがいいのだけれど、でもそれも人間だよ、と。だからローカル、グローバルみたいなものも、何を基準に考えるかですから、自分たちの地域社会を基準に考えていくと、野放図にグローバルな世界が広がっていくというのはやはり、悪の方なのです。だけど悪だからといって拒絶するわけではない。そこで生きているのも現実だよと、そこで認めていくという、そういう発想ですので、別に僕は今の時代において、そんなにローカルとかグローバルとか、閉じた社会とかは考えなくても良くなったのではないかなと思っています。

（原田） 武内さん、今の考えは、国連大学に与する立場からいかがでしょうか。

（武内） 基本的には私は地域で考えていけばいいと思います、つまりグローバル化も地域に影響をもたらすわけですから。今私が国連大学で進めている話としては、途上国が、どういうふうにして今の環境の大きな変動に対して、社会が適応できるのかを考えています。そうすると、問題はグローバルだけれども、解決策はローカルだということになるわけです。今のような構造でものを考えていくと、温暖化はグローバルな現象で地域だけでは防ぎようがありません。しかし、それに飲み込まれて地域社会が崩壊するのでは困る。そのときに、先ほど来出ている話からいうと、その地域の資源をもう一回見直して、そしてそれを地域の人々の能力形成を高めていく。そして伝統的な知恵というのはあるけれども、伝統的な知恵は温暖化には直接つながらないわけですから、そこでつなぎとして、どのようにして現代の知恵が使えるかを考えていく話になるのではないかなと思っています。実は来月もアフリカで、私たちは、地域の大学だけではなくていろいろな自治体だとか、学校だとか、NGO だとか、そういう人たちと一緒に対話をするのですが、そういう試みというのは、もっと世界に向けて、やっていかなければいけないと思っています。

（佐藤） 今、内山さんの善悪の話を聞いていてふっと思い出したのですが、去年の夏に私はラオスのビエンチャンというところに行きました。ラオスはメコン河が流れていますが、そこが40年ぶりの洪水になった。それで旅行社の人に、お前ら、早く日本に帰れと、要するに脱出しろと言われたのです。旅行社の人にそう言われたものだから、帰らな

ければいけないのかなと思って、車で飛行場に向かう道すがら見ていたら、町の人には何の緊迫感もない。そこで、ちょっとこれは気になるので、知り合いのところに降りて寄ってみたのです。

そうしたら皆、結構浮かれているのです。「なんや」と聞いたら、川があふれるのだと。われわれの感覚だったら大変なことなのですが、彼らはどこかこう、わくわくしている。もっと聞いてみると、川があふれると、魚が泳いでくるというわけです。そして、町の市場のバケツとひしゃくがすべて売り切れたなんて、うそだか冗談だか知りませんが、そんなことを言っていたのです。この話を聞いて私がつくづく思ったのは、われわれは洪水というものを見ると、これは全部 100%悪だと思うのです。だけどそれは考えようというか、生活スタイルというか、社会の許容力というか、なんと言ってもいいかわかりませんけれども、そういういろいろな要素があつてのことだと思つてつくづく思ったのです。

火山の爆発についてもそうだと思つていますが、今、火山が爆発するというと、もう大変なことで、三宅島もそうだったし、もうすごいことになるわけです。100%、120%の災害ですよ。だけど縄文の遺跡を調べている考古学者に聞いてみると、火山が噴火した後にはすぐ集落が来るのだそうです。なぜかという、森が焼けて、さっきの武内さんの話にあった生態のかく乱が来て、その場所が一時的に多様になって、そこに動物が来るから、黙って待っていても餌が向こうから歩いてくるというわけです。こんないいことはない。だから、われわれと彼らの違いは何かというと、土地、あるいは所有に対する考え方、社会のシステムの違い、いろいろなものがありますけれど、そういうものが複雑に関係していて、今の時代のわれわれは、火山の噴火とか洪水を完全な悪だととらえますけれど、それは非常に相対的だというような、そういうものの考え方ですね、そういうことをもう一遍よく考えてみるということも、大事なことはないかというふうに思います。

(原田) 私は子供のころ、京都市南部の淀に住んでいました。裏に桂川が流れていて、台風が来たら、学校は休みになるし、夜は避難先で近所の子供と合宿できる。親は朝から昼を上げたり雨戸を補強したりしているので、見ているだけで、わくわく、ドキドキする。ここまで水がきたら水浸しだ、という危機感もある。本当に一大イベントでした。そして、当時は災害と言わずに災難と言ったものです。「えらい災難や」と。だから皆で助け合ひましようという話になって、「責任者は誰だ」とか「補償はどうなる」というような話はほとんどなかったのではないのでしょうか。

1996 年、伊豆大島の噴火 10 周年のシンポジウムに参加した時のことです。山頂に三原神社があつて、溶岩流に囲まれて社殿が残っていました。溶岩流が社殿から 5 m ぐらいのところまで流れてきたのに、奇跡的に流れが左右に分かれたのです。明治維新になって、漁師さんたちが山頂まで参拝しに行くのはしんどいからと、山頂にあった三原神社を麓に降ろしたそうです。すると、噴火が止まって魚が取れなくなりました。噴火によってアンモニアが大気中に放出されたり、新しい溶岩から鉄分が海に流れ込んだりして、プランクトンが繁殖するのに、それが無くなったからです。これは山の神の祟りだ、ということで社殿を山頂に戻したら、めでたく噴火して、神様ありがとう（笑）、となったそうです。

だから昔は災害という言葉はなかった。誰かが被災すると、「えらい災難でした」とみんなで鎮魂儀礼を奉じて遺族を慰めた。「責任は誰にあるのか」とか「補償はどうなるんだ」とかいう話は、ごく最近までなかったことです。

そこで、ご意見を伺いたいのは、小清水先生がおっしゃった時間の集積についてです。今までは、新しい方がいい、素早くやった方がいいという価値観で来たわけですが、ランドスケープにしても農業にしても芸術にしても、時間の集積は重要だと思うのです。先ほど武内さんから、アフリカでのプランテーションが伝統的な知恵を壊したために、村の復旧というか、新しいコミュニティづくりが難しいというお話を伺いました。そういう伝統の崩壊が地域再生の妨げになっているという具体例を紹介していただきたいと思います。

（武内） アフリカの調査を若いころにやって、その中で、焼き畑のことをちょっと調べたことがあるのです。焼き畑というと、何かいかにも古臭くて、非近代的なように思われるのですが、実はあれは、土地の生産性とそれを使った農業との間の、バランスを考えながらやっている、ローテーション・システムなのです。ですから、その地域の中の人々が食べられるような範囲の広がりを持って、そしてあるところは、ここを焼きましょうと。それから焼いて、その次の年は、作物を植えましょうと。最後は土地がやせてきたらキャッサバを植えるのです。キャッサバまで行ったら、その後は森に戻しましょうと。それでまた、別のところをまた焼くという形なのです。

それで、すごく知恵があるなあと思ったのは、ものすごく雨がなくて、植物の成長の良いところは、全部焼いたらそれでまた木が生えてきて、元に戻るのですが、少し降水が少なくて、十分に木が戻らないところはどうかというと、全部焼かないのです。木の枝だけを取ってきて、1 カ所に集めて焼くのです。そうすると、木の本体は残っていますか

ら、それは15年とか20年たつとまた元へ戻るのです。こういうやり方を「チテメネ」、木を切るという現地の言葉なのですが、そういう方式をやっています。これは京都大学の人たちが一所懸命調べているのですが、そういうふうにして、その土地の一種の環境容量をよく分かっているやっていますのです。

ところがこれが、プランテーションと言われましたが、大面積で灌漑をやって、そして収穫物は大量にマーケットに持っていくのは、これはこれでまた、ある時期支配的だったのです。つまりそれは白人たちがやっていたものですから、現地の人たちが政権を取って、土地はもう自分たち返せと言った途端に、もともとやっていた土地利用がもう維持できなくなりました。結局だから今、アフリカの国は、ものすごく困っている。土地利用は混乱の極みです。

ですから私が申し上げている、伝統的なものを評価しながらということは、まさにそのもう一つ前の時代のことを十分理解して、しかし、マーケットがあることも同時に考えなければいけないので、それでどうやっていくのかということに、まだ今のところはなっていない。そこが今、一番ポイントだと思っております。

(原田) 何か補足があれば、佐藤さん。

(佐藤) 焼き畑擁護論が出てきて私もほっとしているのです。昔、「西日本の山に火をかける会」というのを作ろうかと思って、現職の間はやめなさいと言われて、会長は別の人やっています。焼き畑は武内さんもおっしゃったように、あれはやり方一つなのです。日本の焼き畑でも、いろいろなものを植えます。豆を植えたりカブを植えたり、いろいろなものを植えますけれど、九州などの例を見ていると、一番最初に山を開いたときに、お茶と竹を植えるというのです。そうすると、3年ぐらいたって草が生えてきて、もう農地として使えなくなると、そのころになってお茶が大きくなってくるので、つまりそこに住んでいる人たちの感覚でいうと、休耕に入って1年目か2年目の浅い山に入っていくと、お茶の葉っぱが取れます。竹が取れます。何年目になるとこういう植物が生えてきて、これは胃薬になります、というような、そういう生活の体系を持っている。

だから農業というふうに狭くとらえると、わけが分からなくなるのですけれど、どなたかが言っていた、百姓だと考えて、山で暮らす一つの生活のリズムなりシステム、そういうものをまた復活するのだというふうに考えれば、休耕というのは生産性ゼロではないの

です。そういうやり方、体系というのは、これは日本でも東南アジアでも生きている体系ですから、やはり私はこういうものはちゃんと伝統知、そういうものとして復活させて、良いものは良いと、ちゃんと言っていくべきだと思います。

（原田） ありがとうございます。私は、鳩山首相が CO₂ の排出を 25%削減すると世界に公約したことはすばらしいと思います。なぜならば、機械の効率を 25%も良くすることは技術的にはほとんど不可能だからです。何かソフトを変える、つまり生き方を大きく変えない限りは達成できない。だとすれば、日本の社会を大きく組替えるチャンスになると考えるわけです。

今日は、生命を育む大地という観点から、大地との付き合い方を大きく変えなくてはならない、というテーマでお話を伺ってきました。残すところあと 5 分になりましたので、最後に一言ずつ、どういう形で CO₂ を減らし、かつ生活の満足度を上げていくのか。例えば芸術や景観を楽しむとか、物を育てるというような形で、ご提言ください。小清水先生からお願いします。

（小清水） 25%削減とかいう数字を聞きますと、実は私がいる大学は京都市が経営しているのですが、京都市は予算がないので、もう十年ほど前から、毎年 5%ずつ経費を減らせというようなことで（笑）、われわれの給料も減っていくし、学生の経費も減っていくし、もうほとんど大学がつぶれかけているような状態で、数字を聞くとそういうことが頭に浮かんで、とても苦しい、息苦しくなってくるのですが。

私は普段、木を使って木彫、木の作品を作ることが多いので、私が作品を作れば作るほど、木屑が出てきますから、私のアトリエでは暖房のために、薪ストーブを置いて、自分が作ったごみを燃やしながら暖を取っています。しかし最近は、物を燃やしてはいけない、ということになっています。たとえ木であっても、物を燃やしてはいけないと。そういうふうに言われると、科学的知識がないと、全く駄目なんだろうかというふうに思ってしまうのですが、駄目となったらすべて駄目ということではなくて、本当は、これくらいならいいよとかという範囲、基準みたいなものが、世の中で共通の認識になっていくと、これからはもっと生きやすくなっていくのではないかなあと思うので、ぜひそういう基準を示していただきたいなと思っています。

(内山) 鎌倉時代の一遍という有名なお坊さんが、どうやったら本当のことが分かるのですかと質問されて、捨ててこそと。多分これはそうだと思うのです。私たちの今の生活というのは、ふるさとを捨てた、自然を捨てた、あるいは農業を捨てた生活です。まあそうやって、捨てた結果としてある文明社会を手に入れたというふうに言ってもいいわけです。ただ、かつて捨てたものが、今はむしろ大事なものに見えてきた時代というのでしょうか。そうすると今度は、私たちは何を捨てなければならないのか、ということです。

ただ、捨てていこうとするときに、いつも思うのですが、自然に捨てたというよりも、やはりわれわれは強制されて捨ててきた、という感じがするのです。例えば大正時代の歌ですけれど、唱歌「故郷」というのがある。「うさぎ追いしかの山」という。あれを聞くと私たちは非常に牧歌的な、子供がウサギを追いかけて野原を走っている、というイメージなのですけれど、実はあれは、そんなに牧歌的ではないのです。日本は、狩猟というのは白露戦争ぐらいから、軍需産業として育成しました。つまり、兵隊さんが寒いところに行って、当時木綿の軍服を着ていた人たちは、非常に寒くて困る。だから襟のところに襟巻きが欲しかったのです。だから子供たちも、お国のためにといってウサギを追いかけた。だから大正時代にあの歌を聞けば、ああ、お国のために子供たちもがんばっているなと(笑)、むしろそっちに感動したのかもしれないのです。今、われわれは何か、牧歌的に聞いています。

だからあの歌の最後に、「志を遂げて、いつの日にか帰らん」と言っても、村で暮らそうとは言っていないわけで、成功者として、村に錦を飾るということであって、やはり、ふるさとは思うものであって、暮らすところではないという、そういう歌です(笑)。これを子供のときから歌わせてきた、日本の社会というのですか、やはりそこで、国が捨てさせてきた、こういうものはもう一度、これもまた私たちが、もう今となっては捨てなければいけないものになっているのでしょうけれど、いろいろ考えなければいけないなあと思っています。

(佐藤) ここで何か言うと、約束になってしまって、公約になってしまうので、いやだなあと思うのですけれども、私が最近心掛けているのは、「安かろうは悪かろう」と言って回ろうと思っているのです。その心掛けているのは何かというと、やはり週末以外は一人暮らしですから、食べるときは安いことに眼目を置かずに、例えばあそこの裏の畑で作っている大根を買ってきて食べようとか、そういう身近な食生活の改善ですね、それを心掛

けようと思ったのです。安いから行くというのではやはり駄目だと思うのです。やはりその土地で作ったものを食べるということ。そんなことは100%では絶対できませんけれども、心掛けてやればいいなあと思っています。

（武内） ちょっと抽象的な話ですが、私が最近思うのは、里山もそうなのですが、昔は「公」と「私」の間に、「共」という概念があったと思うのです。英語で言うとコモンズです。入会地のようなもので、これはみんなの物で、それでみんながやはり責任を持つ。同時に利益を誰かが一人優先すると、それは荒廃するわけですから、みんなが気を付けて、利益をみんなで共有できるように資源管理をするという仕組みがあったのです。これがなくなってしまうと、こっちは「公」、こっちは「私」というふうになってしまった社会の構造というのが、大地の管理の仕組みから言うと非常にまずいと思うのです。ですから、もう一度、そういう地域社会の中での共有地、コモンズ概念を作りあげていくということが必要なのではないかということで、これを「新たなコモンズ」と言っているのです。多分地球全体でいうと、それがグローバル・コモンズとして、地球資源はみんなの物だというふうな考え方になる。

抽象的には分かるのだけれど、では実際どうするのだということになるのですが、例えば日本のこれからの農山村で人口が減ってどうするかといったときに、そこは地域で支えあうような仕組みでないと、どうしてもいけないので、そういうものを実態として具体化していくことが、人間と自然との関係にとっては、決定的に重要ではないかと思っています。

来年、名古屋で生物多様性条約がありますが、その中で日本からできるだけ情報を発信しようと言っているのですが、その中にも「新たなコモンズ」という考え方を出していきたいと思っています。

（原田） どうもありがとうございました。私は去年からクーラーを一切やめました。どうしても窓を開けるので、外界がよく見えるようになりました。どこかで雷の音がすると、風がずっと涼しくなるとか、日の出や月の出が日に日に変化していくとか、虫の音が突然聞こえるようになるとか。なるほど、昔の人はこういう形で四季のうつろいを感じていたのか、ということがよく分かるようになりました。今年も続けていまして、昔の感覚を取り戻しながら、私たちが捨てたものが何であったかを確認しています。私一人ではエネル

ギー消費に影響はないでしょうが、何か便利なものを一つあきらめてみると、見えることがたくさんあると思っています。

時間が少し超過しましたが、「大地と人」をテーマにした議論を通じて、環境を考える場合には総合的に考えていかなければいけないということが、お分かりいただけたと思います。4人の先生方に感謝の拍手をお送りしたいと思います（拍手）。

（司会） どうもありがとうございました。あらためまして、武内先生、佐藤先生、内山先生、小清水先生、そして原田先生に大きな拍手をお願いいたします（拍手）。

それでは、本日ご講演いただきました先生方がご退場いたします。どうぞ皆さま、いま一度盛大な拍手でお見送りくださいませ。ありがとうございました（拍手）。

それでは以上を持ちまして、第19回 KOSMOS フォーラム「大地と人」を閉会させていただきます。なお、次回は第20回 KOSMOS フォーラム「大気と人」を予定しております。詳細に関しましては、ホームページなどでご案内させていただきますので、こちらもどうぞよろしくお願いいたします。また2009年花の万博記念、コスモス国際賞受賞記念講演会を、10月31日、国連大学にて開催いたします。お配りいたしました資料にご案内を同封しておりますので、ぜひよろしければお申し込みくださいませ。

本日受付時にお配りいたしましたアンケートは、今後の活動の参考にさせていただきます。ぜひともご記入をいただけますようお願い申し上げます。筆記用具が必要な方は受付にてご用意いたしておりますので、どうぞご遠慮なくお申しつけください。ご記入いただいたアンケートは受付にて回収しております。アンケートにご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

ただいまお出口の方が込み合っておりますので、どうぞ順にお進みくださいませ。お帰り際にはお忘れ物などございませんよう、お気を付けください。

本日のご来場、誠にありがとうございました（拍手）。